

座談会 「文明開化と神道文化」



加藤 隆久（かとう・たかひさ） 生田神社宮司、神戸女子大学名誉

教授、文学博士。國學院大學大学院修士課程修了後、生田神社
禰宜、権宮司を経て現職。神戸芸術文化会議議長も務める。著
書に『神社の史的研究』、『神道津和野教学の研究』、『岡能臣集』、
『生田神社』など。

矢野 憲一（やの・けんいち） NPO法人五十鈴塾塾長、元神宮禰

宜。國學院大學文学部日本史学科卒業後、神宮へ奉職。著書に
『伊勢神宮』、『伊勢神宮の衣食住』、『鯨の世界』など。

佐野 和史（さの・かずみ） 瀬戸神社宮司・國學院大學講師、財団

法人神道文化会常務理事。國學院大學大学院修了後、神社本庁
教学研究室長などを経て現職。論文に「関東地方の神社分布」
（『神道宗教』一九九・二〇〇）、「昭和十七年の別天神論争」
（『神道学』一二九）など多数。

阪本 是丸（さかもと・これまる） 國學院大學教授、財団法人神道

文化会理事、博士（神道学）。國學院大學大学院修了後、神社
新報社記者、國學院大學日本文化研究所助教授を経て現職。著
書に『近代の神社神道』、『近世・近代神道論考』、『国家神道形
成過程の研究』、『明治維新と国学者』など。

「オブザーバー」

森 悟朗（もり・ごろう） 國學院大學研究開発推進センター助教

嶋津 宣史（しまづ・のりふみ） 神社本庁教学研究部所教学課長

藤本 頼生（ふじもと・よりお） 神社本庁教学研究部所録事

はじめに

阪本 本日は、生田神社の加藤隆久宮司、元神宮彌宜で、現在、NPO法人「五十鈴塾」の矢野憲一塾長、瀬戸神社の佐野和史宮司、そして私、阪本（國學院大學教授）、また國學院大學研究開発推進センターの森悟朗助教、事務局の嶋津宣史、藤本頼生両氏にオブザーバーとして加わって戴き、「文明開化と神道文化」というタイトルで座談会を始めたいと思います。

堅苦しいのはここまでと致しまして、今回は「文明開化と神道文化」と申しまでも単に明治維新から二十年代までの文物を対象とするのではなく、幕末維新时期から昭和初期まで広く、近代を対象として座談会ができればと考えています。



本日は幕末の開港地^①の一つである神戸から加藤宮司、横浜から佐野宮司、また神戸でもある伊勢から矢野塾長にお話をお伺いしつつ、港に無事着けるかどうか

かわかりませんが、小生も水先案内役の一人として加わった次第です。文明開化の当時は今のようにはジェット機や新幹線もありませんでしたから、港が海外文化を届けた最初の地でもあったわけで、本日はそれぞれ各先生方から港に関わる話も沢山あろうかと思っています。

手元の資料にもありますように、有名な建築家のフランク・ロイド・ライトが今から一〇二年前の明治三十八年（一九〇五）年に神戸を訪れた際に生田神社にも訪れ、神社にガス灯が取り付けられていた写真を撮影していたという秘話を加藤宮司が『KOBECOCO』（月刊神戸つ子）の昨年の八月号（No.539）に「建築家ライトと生田神社 百年前の生田神社のガス灯」という小論で紹介されています。

神戸といえば、日本の近代化、文明開化の上でも、横浜とともに象徴的な都市ですが、最初に神道文化に関わる部分として、また広く皇室、あるいは明治天皇に関わる部分で申し上げますと御承知の通り、明治天皇は明治元年十月、東京奠都の後、一旦京都に還幸され、その際に海路で神宮御参拝の予定でしたが御召艦が整わなかったのでお取り止めになり、その後、再度京都から東京へ行幸された際の明治二年三月十二日に伊勢の神宮を初めて親しく参拝あそばされます。その後、天皇はずっと東京にいらっしゃるようになります。京都からは離れたわけですが、続いて二度目は明治五年五月に

も伊勢へ海路軍艦にて行幸、同二十五日に鳥羽港へ入港、その後第二丁卯艦に移られ大湊へ入り、さらに端艇にて勢田川筋を遡上、伊勢神田久志本村の二軒茶屋に上陸、度会梶権参事下山尚（当時県令は欠員）を先導に外宮へ入御され、翌五月二十六日に神宮へ参拝になります。その後、明治十年の畿内行幸で西の方へ行かれるというときに、御召船の汽船高尾丸で一旦、鳥羽港に立ち寄られた後、神戸港へ入港あそばされます。

この巡幸は一八八日に互る長期巡幸で神戸港へお着きになられて、開通したばかりの京都―神戸間の鉄道列車に乗って京都へ還幸あそばされました。これは本日資料として事務局の方から種々の書籍をお持ち戴いています。『写真集 明治の記憶』（吉川弘文館）という学習院大学資料館の編んだ書籍にも詳しく掲載されています。^②そこに神戸に明治天皇が御着になられた当時の神戸港の写真が載せられています。

その意味で神戸というのは要衝で、当時はまだ陸路はあまり整備されていせんので、一番整備されていたと思われる東海道でも陸路では時間がかかり過ぎますし、鉄道に至っては、明治二（一八六九）年に新橋―横浜間の鉄道建設が決定、翌三年三月に着工、同五年九月十二日に開通しました。とはいっても新橋―横浜間のみで、新橋―神戸間の東海道本線が全開通するのは明治二十二（一八八九）年ですので、幕末に

開港した港湾が一番交通事情としては良好で整備されていますので、神戸港に蒸気船で着き、上陸するわけです。^③

次に鉄道は、当時全て開通していませんが、明治九年に、今で言うところの国道が一等から三等に分けられて、開港地である横浜に向けて、日本橋から横浜に国道一号线が開通致します。当時は横浜のみならず神戸など個々の開港地に向けて道路・鉄道網が整備されていきます。交通一つとってみても実はそのような経緯があるわけです。

横浜については、後々佐野宮司からお話を伺うことにして、まずは神戸と文明開化について、生田神社をも含めた広い意味での神道文化との関わりについて、加藤宮司からお話を伺いたいと思います。

神戸はじめて物語

加藤 阪本先生からタイミング良く、お話を向けて戴きました。今年は神戸開港一四〇年ということで、昨日もちょうど「海の日」で、台風一過の後でしたが「メリケンパーク」で神戸港開港一四〇年記念式典の大変盛大なイベントが行われました。神戸は慶應三（一八六七）年の十二月七日に開港しました。

神戸は横浜や函館など、他の同時期の開港地に比較すると



大輪田泊、兵庫津に始まる古くからの良港にもかかわらず朝廷の反対にあつたこともあつて開港が遅かつた。それは京都に孝明天皇がいらっしゃったからで、安政五（一八五八）年、日米修好通商条約により文久三（一八六三）一月一日に兵庫港として開港が定められていた神戸は開港が決定した五年後の慶応三（一八六八）年に開港しました。その点では横浜から遅れること十年です。

しかし、条約によつて同じく慶応三年に外国人居留地ができてからは、区画化された街路、街路樹、公園、街灯、下水道などインフラ面の整備はともかくとして西欧からいろいろな文物がドツと入ってきました。ゆえに近代の様々な文物は神戸が発信地となつたものが非常に多いわけです。

その点では「神戸はじめて物語」といわれるように、例えば、今では日本もゴルフをやる方が非常に多いわけですが、ゴルフが日本で最初に行われたのは神戸の地です。これは近代六甲山開発の祖とされるアーサー・H・グルームというイギリス人の貿易商が六甲山に四ホールの私設コースを設けて

ゴルフをやつたのが最初で、それが九ホールに拡充され明治三十六（一九〇三）年五月二十四日の日本初のゴルフ倶楽部「神戸ゴルフ倶楽部」の発足へと繋がるわけです。

それから、西洋理髪の発祥は横浜ですが、美容院になりまして、いわゆる「パーマ」、「パーマネット」が最初に流入してきたのは大正十二（一九二三）年に、神戸の三宮で外国人向けの美容院を経営した紺野寿美子さんが、アメリカのパーマネット用の機械を購入して使用したのが最初です。また日本では媒介するネズミの種類がいなかったので流行しませんでした。伝染病のペスト菌が日本に初めて入つたのも神戸です。近代競馬の発祥も横浜が万延元（一八六〇）年でしたが、明治二（一八六九）年に神戸居留地の北、生田神社のすぐ森の横から生田川との間で神戸競馬場（三宮競馬場とも）が開設され、廃止となる明治八（一八七五）年頃までポニーによる競馬が行われていたと伝えられています。これは本年出版した『生田神社史』にも一部掲載していますが、「摂州神戸山手取開図」、「摂州神戸西洋人馬駆之図」という絵図に、生田神社のすぐ横の居留地競馬の様子が描かれており、その往時を窺うことができます。

本日、私は一つ神社と文明開化に関連した話として、一昨年、「国際ロータリー」の世界大会がシカゴで開催され私も参加しましたが、シカゴのオークパークにはあの帝国ホテル

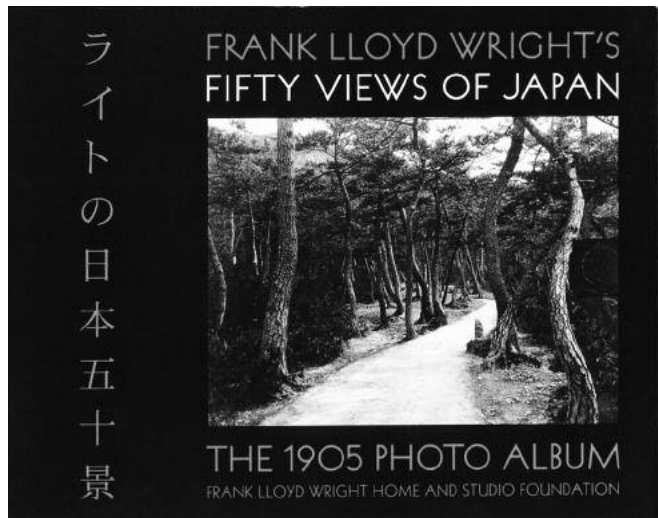
などを建築したフランク・ロイド・ライト^⑥の記念館があります。記念館に参りましたら明治三十八（一九〇五）年にライトが訪日していることもあって、記念館で訪日して百年を記念して「フランク・ロイド・ライト訪日百周年（ライト・イン・ジャパン・センチニアル・フェスティバル）」というポスターが貼りだされてイベントとなっていました。

生田神社のガス灯

加藤 ライトの建築作品の研究者として著名な日本大学工学部の谷川正巳という建築学の教授が、以前シカゴに行つて、ライトが訪日した際の写真五十五枚を調査致しました。

実はこの写真はライト訪日百周年を記念して日本名で『ライトの日本五十景』という書名でアルバム化されて出版されているのですが、出版化される前に谷川正巳さんから、「写真の中に神社の写真があり、どうも神戸で撮った神社や寺の写真らしい。加藤宮司さん、どこの神社か、一つ見てくれなにか」と。それで拝見しましたら、その五枚の写真の一枚は、これは「兵庫大仏」という能福寺の大仏さん、これは戦争で供出され、今は二代目が建立されていますが、それが一枚。あとの四枚は実は生田神社の写真でした。

そのような経緯があつて、シカゴに行った際には是非、ラ



『ライトの日本五十景』（海外で実際に出版されたもの）

イトの記念館に行きたいと思っていました。ちょうどライト訪日百周年の年にシカゴの記念館に行きましたら、先ほど申上げました「ライトの日本五十景」というアルバムを発行していました、購入致しました。実はこれが五十五枚の写真の

アルバムです。そのアルバムにライトが撮影した五十五枚が全部写っています。

彼は明治三十八年にこのシカゴのオークパークから、はるばる来日してきたわけです。あの頃はバンクーパーまで行か



ライトの撮影した生田神社（左端にあるのがガス灯）加藤隆久氏提供

なければ日本行きの船が出なかった。バンクーパー港から船に乗って横浜に着きまして、そして、横浜から、箱根、名古屋、京都、神戸、岡山、高松と五十三日間の船旅です。そして再び横浜へ戻って、今度は日光へ行つて、五十五枚の写真を撮影しています。

この写真集を見まして非常に面白いと思ったのは、先ほど阪本先生からも紹介のあったように「生田神社のガス灯」の話です。生田神社の本殿を移した写真の中に「ガス灯」が写っています。左右両方向から撮影されていますが、両方ともに神社の本殿附近にガス灯が付設されていたことがわかる写真がありました。

私はこの写真を見て、明治三十八（一九〇五）年当時、御本殿の前にガス灯がついた神社があるかと思ひ、種々の近代の写真資料を調べてみましたが官国幣社では恐らくないと思います。湯島天満宮の境内にガス灯がついていたと伺っていますが、堂々と本殿の前に近代化の象徴のようなガス灯がついていたというのは生田神社以外にないと思います。

ちなみに神戸でガス灯が設置されていたのは、生田神社にガス灯があつた頃から遡ること約三十年、明治七（一八七四）年です。しかも、先ほども競馬場がすぐ隣にあつたという話をしましたが、生田神社のすぐ南側には神戸居留地がありました。

当時、兵庫という地域は二万人を越す人口があり、古くからの港町でもあったので新たに居留地を作る土地もなく、その方針自体にも反対があつて結局、神戸より東の方へ建設することとなり、兵庫から離れること三・五キロ先の神戸の元町、三宮を中心としての約七万八千坪の土地を造成し神戸居留地（旧居留地）が建設されることになります。

その頃、どうも生田神社の後神秀熙祠官（明治初年当時は生田神社は縣社であつたので宮司を祠官と呼称）というのは非常に進取の氣風があつたのか、神社の境内近くにフランス領事館を設けさせるとともに、神社の門前である神戸の地に一二六区画の居留地を設けさせることをOKしたんですね。

そうした経緯があつて神戸居留地を中心に明治・大正と外国の近代文明が関西へと流入してきて、東京であつても、横浜や神戸から発信された西洋文化が伝播してきたものが多いわけです。実は開港当初、神戸沖を通る船は生田神社の高灯籠が灯台の役割を果たしていましたから、神戸港に入る外国船はこの灯籠を目標にして入港したことが知られています。神戸沖を航行する日本の帆船は当時、生田神社の高灯籠が見えると、帆を降ろして生田神社に航海の安全を祈る慣わしがありましたから、事実であつたと考えられます。

それはともかく、ライトが撮影した五十五枚の写真は、大抵は寺院です。しかも、神社のように写っているものでも、

寺院の境内にある神仏習合時代の頃の名残のようないわゆる末社、小社が多い。ライトは「プライベート・シントウ・シユライン」というふうに訳していますが、神社が写っているのは実は生田神社だけです。あとは東本願寺の別院、醍醐寺などの寺院ばかりです。あとは華嚴の滝が割合多く撮影されています。

私の神社にも勿論、戦前の写真がありますが、ガス灯のついている写真は、ライトの撮つた写真を見つけたことによつて初めて明らかになつたわけです。ガス灯のはじまりは横浜で明治五年でしたが、明治七年に東京と神戸にガス灯がついた後、明治二十年には東京に次いで全国で二番目の電力会社、「神戸電灯」という会社が元町通六丁目に設立、栄町通六丁目に火力発電所を設けて、翌年の明治二十一年に元町通西側の湊川神社から相生橋に街灯をはじめて設置し点灯します。⁹⁾

再び「神戸はじめて物語」になりますが、この神戸電灯（のちに神戸電気鉄道と合併、神戸電気となる。神戸市電気局の前身）という会社は、初の女性社員を雇用しました。その意味ではOL、オフィスレディーの始まりは神戸ということがいえるわけですが、話は変わつて神社において、今日は佐野宮司もいらつしやるわけで、横浜にもそういうところはあるのかもしれませんが、とにかく世界的な建築家のライトが横浜から高松まで行っている間に、街道筋を通つたついで

に立ち寄っただけなのかもしれませんが、生田神社を撮影していたということは非常に興味深い事実だと私は思っています。

阪本 今、加藤宮司さんから、ライトの写真をめぐって神戸の文明開化発信に因む話を幾つかお聞きしましたが、神戸と並ぶ開港地で、先ほど申し上げました国道、鉄道にしても、最も東京から近いということで文明開化のはじまりは何かと一番最初は横浜が多いわけで、佐野宮司から、横浜についてのお話を何か戴ければと思います。

神戸と異なる横浜の開港事情

佐野 加藤宮司がお話されたような続きのような話は難しいですが、先ほど加藤宮司から神戸が開港一四〇年で横浜より十年遅れたと仰っていました。横浜港は、安政五（一八五八）年に締結された日米修好通商条約により、翌年の安政六（一八五九）年に現在の関内地区にあたる横浜村に開港されました。

現在、横浜市の方でも、神戸と同様で再来年に開港一五〇年になるというので、民間団体や市当局を中心に色々イベントの企画・準備を進めています。しかし、私自身は横浜のど真ん中に住んでいるわけではなくて、同じ横浜市域ですが



昭和十一年に横浜市磯子区に併合され、後に金沢区となった金沢八景、金沢文庫のあるあたりの瀬戸神社です。中世では金沢郷は海路の要衝として横浜村より栄えていた地域とはいえ、いわゆる近代以降のハイカラな「横浜」の文化というのは、私とは若干イメージの合わないというか、身に着けて肌で感じていないところがあります。

そうは言っても少しばかりは歴史も勉強してきましたので、鎌倉や横浜など中世から近現代に至るまでの神奈川の歴史を見ていて、神戸と横浜の港が開かれていく中での差異というのは、神戸という町は、いわば神功皇后の時代からの町としての歴史があつて、平安時代末期の治承四（一一八〇）年に福原京が築かれ首都でもあつた時代もあり、さらには港町としては、平清盛によつて日宋貿易で栄えた大輪田泊、鎌倉時代には重源によつて港を修造して国内第一の港となった兵庫津の時代、さらには室町時代には日明貿易で栄えた時代もあるし、港町として常に長いスパンの歴史を育んできた地ということがまず挙げられるわけです。

それに対して横浜の方は、近くの鎌倉に幕府も置かれ中世の政治の中心として栄えていたわけですが、横浜の街自体にはあまり関係なく、その歴史も郷土史は別としても日本史の通史としての記述の中では、近世以前はほとんどこれといって特記されるようなものはありません。横浜は鎌倉にやや近い半農半漁の一寒村であつたわけです。いざ幕末になつて幕府が港を開こうという際にも、当初、条約では神奈川宿に港を開けというのを、神奈川というのは東海道五十三次筋の宿場で、安全を保つような建物もなく、また開国反対派が外国人を殺傷するような動きが少なくなかつたため、江戸へ往來する日本人の通行が多いということで幕府が反対し、今の横浜駅のあたりは大きな入り江になつていましたので、神奈川宿から入り江を挟んだ反対側の今の大棧橋から山下公園のある辺りの横浜村（現在の横浜市中区あたり）に開港したわけです。

つまり神奈川宿から横浜村の方を、ここも神奈川の内に入ると強引にいつて開港したのが、横浜港のはじまりで、築港された場所は当時、ほとんど住民もいないような新開地でした。この横浜村の後背地では江戸時代に吉田勘兵衛という人が大規模な新田開発をやり、「吉田新田」という造成地となつていて、そのちょうど先端部分を開港場として決定し土木工事をやりながら、全く新開地として港を築いていったとい

う経緯があります。

そういう経緯から何がわかるかというと、どちらかといえば、神戸のように古い歴史や伝統がある中で新しく入つてきた文化との融合というより、何事もストレートに新しい文化、文物をそこに定着させてしまうというのが横浜の特徴であるといえます。ですから、横浜居留地^⑩を設けるにしても、もともと何もない空き地に道路を引いて居留地を造成するという要素が強かつたので、近くに生田神社のような古来からの歴史がある神社の近くにあつた神戸居留地とは違います。何か神戸と横浜にはその辺の違いがあるのではないかと思います。

横浜の地元の書店に行けば神戸と同じように横浜はじめて物語の本がいろいろありまして、そんな書を紐解けば、神戸と横浜どつちが早いという自慢話、競争のような話は沢山できると思います。横浜は当然、場所的なものもあつて神戸よりもむしろ早くから入つてきたものもありますが、港町としてのそもそもの歴史自体に大きな違いがあると思います。

横浜は神戸と違つて埋立地をどんどん造成しながら西洋文明を導入していきました。鉄道も、新橋―横浜間の鉄道建設のため、今の横浜駅の周辺は今のみなとみらい地区のように大規模な埋立地だったところを、鉄道用の土手をずつと造成して、今の桜木町のあたりまでレールを引いて駅の横浜側の

終点は、本来であれば、ほとんど海の中に沈んでしまうような場所、つまり言ってみれば、横浜駅や桜木町駅は、今でいえば、神戸に新しくできた神戸空港がある場所に駅を設けたという感覚です。当時の感覚を現代に直して考えれば、そのような感じでできた駅だったと思うんですね。

例えば、先ほどからガス灯の話が出ていますが、横浜でガス灯が灯ったのが明治五（一八七二）年のことです^①。このガス灯建設事業を推進したのが高島嘉右衛門という人物です。江戸の材木商のせがれですが、時代の動きに敏感な商才の持主であつたようで、現在ならさしずめベンチャー起業家かも知れませんが、神奈川と横浜の間の埋め立てをして、鉄道用地を政府に献上することでその他の用地をもらいうけます。これが横浜駅と桜木町駅の間あたりの高島町です。この嘉右衛門がガス事業の免許を獲得して、今日の伊勢山皇大神宮の麓のところにある本町小学校のあたりにガス発生炉とタンクを建設し、この工場からのガスによつて本町通りや馬車道にガス灯がともされたわけです。埋め立てや開発事業と文明開化が密接なエピソードのひとつでしょう。ちなみに嘉右衛門は高島易断の祖としても知られる人物ですが、若い頃に幕府禁制の小判取引で入牢した時に易経を読みふけたのがその始まりといわれています。文明開化ベンチャーの風雲児が、易断の開祖というのどこかで今日のテーマとつながるのか

も知れません。

ビールについては横浜開港当初から輸入されていたように、文久元（一八六一）年十一月に横浜の外国人居留地では既に欧州からの輸入ビールが飲まれていたことが知られており、キリンビールの発祥は横浜です。またアイスクリームについても咸臨丸で渡米した勝海舟が食べたというのは知られています。彼に私淑した町田房蔵が明治二年六月に横浜馬車道通り（常磐町五丁目）に開いた「氷水屋」において日本で最初のアイスクリーム「あいすくりん」の製造販売を始めたのが始まりとされています。

加藤 今、佐野宮司がいわれたように、神戸はそれこそ神功皇后の昔から、町があり、また平安時代末期、平清盛がこの港を開削して日宋貿易をやるうとしたわけです。神戸にはそういう歴史があり、かつ京都や大阪が近く、天皇さまも京都御所にいらつしやいましたから、尊皇攘夷の時代にあつて開港への抵抗が非常に大きく、横浜より開港が遅れたということでしょう。

佐野 加藤宮司のお話を聞いていて、横浜は神戸とは、まづ歴史が違うなと感じました。横浜という場所は、江戸時代には東海道を品川宿から西に川崎宿、神奈川宿があり、保土ヶ谷宿があり、戸塚宿がありそこが盛り場で、それ以外にもその周辺に昔から、封建制の時代からいろいろな村々はあつ

たわけですが、横浜の地先埋立地という歴史の無い空白地帯的な場所をわざわざ選んで、むしろ江戸に近い場所での開港を最初にしたという、そんな雰囲気を感じられますね。

神社と開港地とのかかわりをめぐって

阪本 それでは神社との関係みたいなものは何か見つかりませんか。

佐野 横浜は大規模な埋立地を使つての開港でしたので、もちろん、競馬場や居留地も作られたわけですが、神戸のように生田神社と競馬場、居留地のような関係はなかなか見つからない。どちらかというと、横浜自体がそれまで小さな村でしたので、港周辺にある神社自体も小規模な神社ばかりでした。開港当時の絵図を見ると、必ず出てくるのは、港の真ん中に弁天社が一つ出てきています、今でも関内あたりでちよつと夜遊びしようと思うと「弁天通り」と言っただけでタクシーが何もしらずに行つてくれる通りがありますが、そのような意味で神社といえれば弁天社との関係があるぐらいだと思います。勿論、元町や石川町あたりは古くからの陸地ですから厳島神社や諏訪神社がありますし、さらにその周囲を広く見れば、式内社でもある杉山神社が多数分布していたり、神戸の神明社が鎮座していたりもするのですが、それらとは

少々離れた埋立地が開港場となつていったといえます。

加藤 その点でいえば、横浜は港町としての歴史がまだ浅かつたということでしょうか。フランク・ロイド・ライトも、最初に日本に着いたのは横浜港であつたわけですが、実際、横浜では何も写真を撮つてない（笑）。

佐野 横浜で写真といえば、フェリーチエ・ベアトという写真家が文久三（一八六三）年の来日から明治十七（一八八四）年に離日するまでの二十一年間にわたつて国内で多くの写真を撮影しています、その写真集が『F・ベアト写真集1・2』として二冊、横浜開港資料館編で明石書店から出版されています。確か『写真集1』の方が風景画で『写真集2』の方が風俗画だつたと思います。本日資料として事務局から持参載いていますね。

F・ベアトも滞在期間が長期にわたつたこともあり、横浜だけではなく、かなり全国的に旅行をしていますし、鎌倉や金沢八景など近在の名所の写真も残しています。横浜の居留地の風景は、例えば野毛の山の上の方から撮影したものがありませんが、要するに横浜居留地があつて、長崎の出島のように掘割の向こう側に洋館の並ぶ居留地を造成している。いわば埋立地を作つて巨大な出島を作つた。長崎の出島ではないですが、そのような形で近代横浜の歴史が始まっています。その後生糸貿易がどんどん盛んになつてきて、日本人商人の

街も拡大していったわけです。神戸では領事館が神社の境内の近くに置かれるという話がありました。横浜では、安全上の理由を主として最も近い神奈川宿地域にあつた多くの寺院に諸外国の公館が置かれていました。安政六（一八五九）年七月四日には神奈川宿の浄滝寺にイギリス領事館、本寛寺にはアメリカ領事館が、フランス領事館は甚行寺や慶運寺、オランダ領事館は長延寺に公館を開設しています。

神社についていえば、領事館等に境内を提供できるような規模のものではなく横浜には元々小さな神社しかありませんでした。開港当時はまず野毛山に開港場を取り締まるために外国奉行所（のちに神奈川奉行所）が設けられましたが、急速に進む欧化の流れを防ぎキリスト教への対策の一環として明治四年に伊勢山皇大神宮が創立されます。この鎮座によつて時を同じくして野毛山も伊勢山と改称されますが、大きめの神社はこれが最初でしょう。結局、社会的な背景としては今、例えば、晴海や豊洲から先の東京湾の埋立地の方へ行つて古い神社がないのと同じような状況、事情というものも一つあつたんだと思います。ベアトが野毛山の上から写真を撮つている手前の山の高台あたりには、神社の森が見えており、海岸辺りに古い神社が点在しています。

加藤 ベアトの写真の手前に見える森はどうも弁天社の森ですね。



伊勢山皇大神宮

佐野 そうですね。確認するために私も横浜の昔の絵図・錦絵を少し持ってくればよかったのですが。

阪本 先ほど佐野宮司より、横浜の伊勢山皇大神宮のお話が出ましたが実はこの時期に府県庁や開港場への神宮遙拝所

の建設が時を同じくして行われるようになります。

例えば『神宮・明治百年史』に詳しく書かれていますが、後に神宮少宮司となる浦田長民は明治四年八月から五年三月までの神祇省出仕中の間に「府県庁并開港場へ神宮遙拝所ヲ建シ事ヲ乞フノ儀^⑫」というのを献白して府県庁所在地、開港場に皇大神宮の遙拝殿を建設することを進言していますが、このことは伊勢山皇大神宮の現在地への鎮座と時をほぼ同じくしてあった動きの一つであろうといえます。また伊勢山以前には、明治元年十一月に開港した新潟港に大神宮を建設せんとする建議が明治三年二月にあります。このように明治初期にお伊勢さんを全国に勧請するといった政策も始まっているわけです。

伊勢山皇大神宮の創祀についてももう少し詳しく述べておくと、明治に入って当時神奈川県知事であった井関盛良が旧戸部村の伊勢の森にあった小祠を遷座して、港都である横浜総鎮守として祀る伺書を明治三年十一月二十四日に弁官（太政官）に提出したことから、四年九月五日に神祇省から「其県管内伊勢山大神宮ノ義ニ付、過日御伺ノ趣致承知候。右神社ハ元伊勢神宮勧請ノ儀ニ付、官幣國幣社等外別格ニ処シ可有之」と定められ、そのため神奈川県は告諭書で「伊勢山ニ皇祖ノ御社ヲ勧請アレバ、高麗ノ宮殿ヲ創立シ、国家ノ鎮護ヲ祈リ、人民ヲシテ崇敬胆仰セシメントス」と布告し、明治

四年四月十五日に社殿が完成し、遷座して伊勢山大神宮（のち伊勢山皇大神宮と称す）が鎮座、明治八年には県社に列せられ、これが地方に建設された大神宮遙拝殿の一つの典型となったわけだ。

話はかわって明治天皇の行幸の話に戻りますが、先ほど申し上げましたように、鳥羽港に明治天皇がお着きになって、伊勢の大湊を経由して、現在の二軒茶屋餅があるあたりから神宮へ御成りになりました。伊勢は港町というわけではありませんが、伊勢の宗廟ということで、道路網の整備は最初に伊勢の宗廟へ国道を通してゆくというのが一つの目標になるようなことがありました。その点でいえば神都、伊勢の神宮を中心とした一種の文明開化と言いますか、幕末維新から明治二十年代ぐらいの間に、神都である伊勢も随分その街並みから何から変わっていくと思いますが、その辺を神宮禰宜でもいらつしやいました矢野塾長から、文字通り、神道文化との関わりでお話を願えればと思います。

文明開化と神都伊勢

矢野 伊勢の場合、明治維新、さらには明治四年の太政官布告で神社が「国家ノ宗祀」ということになって、神宮も御改正され、神宮自体が大改革をされていきますから、町の



人々も非常に動揺していたわけなんですよ。江戸期には隆盛を極めた御師の制度が廃止されますし、さらには政府の施策として神職の世襲が廃止されたのですから、伊勢の市民の三分の一が失業者というぐらいの動揺がおきます。そして、

内宮の宇治橋の中にあつた御師の館、大きな建物が皆、廃墟と化してぼろぼろになっていきました。ちなみに伊勢では意外とガス灯の導入は非常に早い。倉田正邦の『宇治山田明治年代記』には「神宮職員等、宮城内へ瓦斯等を献設す」として明治八年四月とあります。神戸と変わらない時期ですね。横浜と比べてもさほど遅くない。

加藤 神戸と同じですね。

矢野 明治七年の冬にガス灯の点いた銀座に遅れること約四カ月ですから、神都伊勢へのガス灯の導入は早かったんですね。それは何故かというと、どうしても神宮に明かりが必要だったからだと思います。つまり神宮では年間の祭典が他の神社と比べて多く、さらには夜の祭典が多いので真つ暗闇の中で行うことが多いわけです。宇治橋の内の宇治館町の御師

などの民家は、明治の神宮御改正で皆廃墟になつてきてボロボロになつていたので、明かりが灯つている家などない。神宮の常夜灯は、節分（豆撒き）の日と除夜の日と、祭りがあるときは高張提灯を角々に臨時に点けますが、それ以外は全くないわけですから。

そのため、今は夜間参拝停止なんてことをやっていますが、かつては参拝者が夜間に参拝しますと、森の中に紛れて行方不明というのが何遍もあるわけです。だからといって蠟燭を立てるといふのも抵抗があるわけです。植物油ならいいですが、動物油になると種々の事情で使えません。それで、神宮では松明^{たいまつ}を焚ぎます。それと小さい篝火を角、角で、祭りの時など設置しました。

幸いに祭りは旧暦では十五日、十七日ですから、天気さえよければお月さんが出て非常に明るかったです。だけど闇夜は非常に困つたと思います。だから、どうしても明かりが欲しいということで、まず、ガス灯を導入したわけです。職員が全員で寄付して設置したという話ですが。

加藤 それはどのあたりに設置したのですか。

矢野 一つ。参道の曲がり角ぐらいでしょうか。

加藤 内宮の？

矢野 場所はわかりませんが、参道に一つ。ところがデザインが悪いということで、恐らく二年ぐらいで撤去して神域

にマッチした新製品に換えていますね。明治十一年には『神宮司庁沿革略叙（稿本）』に「両宮城内瓦斯灯形常灯を撤却し更に常夜灯を設く」とあるので間違いない¹³。生田神社の写真のものはデザインとしては古いですね。

加藤 生田神社のガス灯も設置後しばらくして撤去されているんですね。矢野さんの仰るように余りにもデザインが似つかわしくなかったのか、どういう理由かわかりませんが生田神社でも撤去されています¹⁴。

矢野 それで今度は、ちょっと時代は下りますが、明治二十八年頃に電気会社ができ、そして電気が通ようになるわけですが、今度は伊勢市民が電気は火災が起こるから危ないと言って大反対します。

私の祖父が明治九（一八七六）年生まれで、父が明治四十一年（一九〇八）生まれですが、その父が子どもの頃に伊勢で電気を初めて点いたのを見に行ったというのを聞いたことがあります。外宮前に電気が点いたというのですが、旧師職で宇仁館という旅館業を営む西田貞助さんの家ですが、それが世義寺屋敷といわれるほどの大邸宅で、旅館ですが、そこへ自家発電で電気が点いて、物凄く電気が明るかったという話を聞いたことがあります¹⁵。

それで市民が皆で見に行ったというのが、私の子どもの頃、よく聞きましたが、今の外宮の奥にある山田工作場の入口あ

たります。

その後、伊勢ではすぐに電気が普及します。電気は便利なものですが危険ではないというのがわかってきて、しかも、電線を地中に埋めたのです。電柱がないので電気が通っている様子が全然見えないので、反対していた連中も知らないうちに常夜灯ができました。

電球も見えると駄目だということで、覆い、囲いを電球に触れないようにして、今の常夜灯は、随分参道にもありますが、火除橋の外までは支柱が石です。これは割に誰も気がついていませんが、火除橋の外までは石。火除橋を一步入ると木です。区別しています。あれはよく考えてやったと思うのですが、木と石と使い分けをしています。火除橋の外は明治維新までは市街地の一部でしたから。

加藤 神戸の居留地にガス灯がついたのは明治七年でしたが、明治二十一年に「神戸電灯会社」というのがアーク灯の街灯を設置しました。アーク灯によりだんだんハイカラになっていったわけです。そして、また明治三年には「神戸電信局」が電話の電信局を開設しました。その頃の歌に「風の便りに聞いた昔、今は針金、ものを言う」というのがあり、針金がものを言うというようにことが伝わったという風刺がありましたね。お伊勢さんにガス灯が灯つたのが早かったというのは驚きです。

矢野 ガス灯は早かった。必要に迫られてやったと思いま

すが、神宮は最初は何でも新しいものを受け入れるのは嫌がる性質があります。現在でもそうですが。

加藤 そうでしょうねえ。

矢野 しかし、一旦新しいものを受け入れると、どんどん取り入れてゆくのが伊勢の良い所でもあります(笑)。

開化論と国学者

佐野 これはお伊勢さんだけではなくて、むしろ、阪本先生にも御意見を聞こうと思いますが、いわゆる文明開化という中でいえば、典型的なものが天文学や動物学の分野でいう「地動説」と「進化論」の受容についてです。この二つを日本人はアレルギーなしに受け入れているのではないかと思います。

アメリカでは今でも一部の教会で進化論は教えないというところがあるようですが、地動説と進化論に対する強烈なアレルギーがないのが日本の文化なわけで、ここに神道文化というものが、既にどこかに関わりがあるのではないかと私は考えています。ここに神道的な思考方法、思考回路と日本人との関係があるのではないかと思う時がありますが、いかがでしょうか。

阪本 幕末の仏教界では地動説に反対し、仏教天文学を主

唱した熊本の浄土真宗の僧侶、佐田介石がまさにその典型的な事例ですね。⁽¹⁶⁾佐田のように一部の仏教界の地動説どころか、地球が丸いということ自体が受け入れがたいというような、そういうアレルギーを示していたのが仏教側にはありますね。地動説や進化論の受容ということに関しては、国学、神社神道には、アレルギーが非常に少なかったと思います。逆をいえば、だから我が国は明治維新で欧米の文化を日本的に受容し、急速に普及することが可能であつたと思います。

佐野 国学の中で黄泉国のことを理解する際に、日球、地球、月球という言い方で、正確な天文学にはないですが説明しているような江戸時代の国学者がいますね。

加えて、渋川春海の暦法にしても、彼も広い意味では国学者、神道家の一人ですよね。非常に科学的な天文学というのを江戸時代に既に取り入れているし、関孝和にしろ、伊能忠敬にしろ、国学者や神道家の分類には入らないかもしれませんが、文明開化の前提として、近世の日本人は非常に先進科学を進んで取り入れるような思考回路があつて、その辺を考えれば、神社がガス灯や電球を受け入れていくということに、何か共通性があるのではないかと思うんですがね。

阪本 今のお話を聞いていて、それこそ加藤宮司の御専門である幕末期からの津和野派の国学者というのが維新期の開

明派官僚として活躍しました。伊勢にも関わるようなことで言えば、例えば、神祇大副や元老院議官を務めた福羽美静はかなりの開化論者で、明治七年二月に『文明開化真面目』という文明開化についての本まで出版していますし、先ほど申し上げました明治天皇が東京へ二回目の行幸をされた際には、鳥居が倒れたというので大騒ぎになったことがあります。福羽は「建てたものはいずれ倒れるのが当たり前だ」といつて周囲の心配を一蹴したという有名な話があります。神道文化という点で言えば、福羽美静のような明らかな国学者、神道家のうちには開明的な立場をとる人物から、そんなものは罷りならんとして全く反対していた国学者まで非常に振幅がありました。そういう中で神社、あるいは神道というものが一種、悪くいえばもみくちゃにされながら、近代化を乗り切っていかなければならなかったという事情があります。

その際にかなり合理的な、今、佐野宮司さんが仰ったように、日本人の志向と言いますか、古代から文物を受け入れて取捨選択していくという、ちよつと手前味噌な話になります。が、國學院大學で本年三月まで文部科学省に採択されて実施していた「神道と日本文化の国学的研究の研究発信の拠点形成」のCOEプログラムというのは、まさに現代の文明開化への対応という訳ではないですが、一種の主体性を持って外国のものを取捨選択して、また神道的な新たな文化をつくり

出していくための発信というようなものを考えてやってきました。あまり目にははつきり見えませんが、COEでの研究成果の一端としては、近代でも現代でも、新しい文化をうまく取捨選択しながら日本的に受容していくということが、日本人の生き方あるいは文化としてあったことを示すものでした。

幕末維新期というのは、もろに文明開化というものに神社がどう対応していくのか、あるいは、神道がどう対応していくのかということが試された時代で、仏教とは違った意味で、今まで経験したことがないような大変革が起った時代でもありました。伊勢の神宮などは明治四年に神道史上にも残るような、まさに一大改革がなされていますし、先ほど明治初めの種々の写真のお話がでしたが、幕末維新期に横浜に來た外国人は大体鎌倉などの写真を写すわけですが、鶴岡八幡宮の写真を見ればわかるように、神仏分離がなされるまで境内に建物として残存していたものと、現在の鶴岡八幡宮を比較してみると、全く境内の様相も変化していることがわかるわけです。

また伊勢の神宮も、先ほど矢野塾長が仰っていましたが、明治維新までは、宇治橋を渡つても、火除橋の辺りまでは、御師の邸宅をはじめ一種の民家が密集しており、時には火災があつたこともあり、御改正を契機としてきちんとした対応

ができるような設備、苑内、境内にしていかなければならぬということとで整備がなされていくわけです。

神宮の改革がなされた当時、古いものといっても、いつからが古いのか、あるいは、明治維新といってもその模範とする時代を一体どこに求めるのか、戻すのか、復古といっても、そのせめぎ合いみたいなものが文明開化とぶつかって、広い意味での神道文化というものを鍛え上げていったのが明治維新からの近代化の時代であつたというふうに私などは一種、抽象的ではありますがそのように思っています。

特にお伊勢さんの変革と言いますか、私の父、阪本健一も明治神道史を専門としていましたが、お伊勢さんの変わったものと、変わらないもの、それはまさに文明開化の時代、明治四年の改革はまさに最たるものでしょうし、御遷宮も、これは明治二年までの御遷宮とそれから二十年後の明治二十二年、四十二年の御遷宮というのは全然違います。

おかげ参りなども、ちょうど明治二十三年が明治に入ってから最初のおかげ参りの周期に入つたわけですが、その時も全く幕末までとは違ったものになっていった。例えば汽船で秋田から伊勢まで船でおかげ参りをした記録があります。が、新年正月のことは明治二十三年の資料が残っていますけれども、そういった意味で、明治の初めから二十年代ぐらいまで、神宮を中心とした伊勢の変化について、何を受け入れ

て、何を残したのか、何か象徴的はお話でも矢野熟長の方からお伺いできればと思います。

矢野 私専門外の部分でもあり、なかなか申し上げにくいところもあるのですが、どうも、お上、つまり天皇陛下がお決めになられたことを、人々がそれに逆らわずにやつてきたということが一つ挙げられますね。例えば、「牛肉を食べてもOK」になつたことなどは端的な例ですね。「牛肉を食べるからでも神宮への参拝は苦しからず」ということになりましたから、辞めた御師連中など御改正前の当時の神宮の旧祠職、職員としては物凄く抵抗があつたと思うんですね。

でも、町の人は皆お上がやつていっているといつて、旧祠職の人たちも地元の人達にすぐ押し切られるということになります。何よりも文明開化で西洋のものを取り入れるというよりも、仏教色を無くすという責任の方が強くて、内宮附近の宇治地区にも、二十二カ寺の小さいお寺があつたとされていますが、神仏分離、廃仏毀釈の流れの中で、宇治にあつた寺を皆取り壊したり、見えないところへ移転したりしています。

当時の地元の人々や神職は仏教色をなくすということに一生懸命で、特に文明開化というようなことを意識しなかつたと思うんですけれどもね。

佐野 牛肉の食としての受容という点では、本日は松阪牛と神戸牛の産地からの方々が揃いな訳ですね(笑)。横浜

牛というのはあまり聞かないですが（笑）。

阪本 先ほどの話をお聞きして、文明開化に繋がる部分では、宮中の改革が明治三年から四年に実施されていきますが、先ほどの牛肉、あるいは、牛乳も明治天皇さまが最初にお飲みになったことで庶民にも広がるようになります。

先ほど佐野宮司が仰った国学と文明開化との繋がりでいえば、神道の側でも割合ハイカラというより、むしろ復古的といえますか、仏教に対する反発というのがありました。

そうした反発に対する一例としては、歌人としても著名な近藤芳樹という明治八年から十二年まで宮内庁文学御用掛などを務め、明治天皇のお側にお仕えし、八年の東北巡幸に供奉した国学者、歌人がいます。彼は、明治五年七月に『牛乳考・屠畜考』という書を著し、牛乳というのは別に大昔からあって、仏教が日本に流入するようになってから、仏教思想が大きく影響して日本人は飲食しなくなったけれども、古来の日本では牛乳も作っていたし、飲んでいたということを国学者として、きちんとした事実に基づいた考証をするわけです。

そこは近藤も国学者として昔にあった事実を史実に基づいてきちんと調べ、考証を行います。元々、日本人は牛乳を飲まなかったなんてことはいかなかったとか、あるいは肉を食べても別段におかしくないというようなことを考証すること、一種の国学者や神道側からの啓蒙、今までの仏教という

のは殺生だとか、四つ足を忌んできたのは、それは日本の古来のものではないというような深層的な意識にあったものを、もう一遍事実に基づいて調べて啓蒙していくというような、一種の新しい形での国学が、神道思想、神道文化というもの、一種の違和感なく広がっていく。それが一見、国学者というところと頑迷固陋のようなイメージに見えますが、そうではない部分があったということです。

そういう意味での近現代の国学者の最たるものが本日お見えの加藤隆久さんじゃないかと思いますが（笑）。

どうも、もう一遍考え直してみますと、存外、近現代では仏教に比べて、むしろ神道の方が文明開化に適応したといえますか、矢野塾長がいわれたように、確かに「お上のいうことだから」ということで受け入れたものも多々あったわけですが、逆に余り抵抗もなく、お上の言うことをそのまま受け入れるだけの素地が、日本文化の中にあつたというその背景は何だろうと。

そこに広い意味での神道文化といつていいかどうかはわかりませんが、何かの素地があつたと。それに拍車をかけたのが明治維新政府の一種の開化政策で、それに乗っていった人たちが多かったからだとは思いますが、ただ無理やり神道文化との関連性にくっつけて論じるのもどうかあという気がします。

佐野 確かにかなり苦しいとは思いますが。

シーボルトのみた生田神社

加藤 そのことについては、先ほど阪本先生が福羽美静の話を出版していましたが、福羽に関連して、ちよつと飛躍しま



すが、即位礼でも、孝明天皇さま迄は、いわゆる中国の天子の衣冠、礼服である袞冕十二章の服装をして、お香を焚いていたりました。

その礼式を改めてきちんとしたものにしてしようと福羽や矢野玄道が考証作業を行って、明治天皇の即位式では束帯に変更して、帷幄に真櫛を用いるようになって、しかも、お香のかわりに地球儀を持つて来られて、それを日本のある箇所には左右と天皇がお香を当てられるように変わったわけです。

しかも、中国的なものから、いわゆる神武創業に還れという話がこの時期にあります。福羽ら国学者は新しい文化を取り入れながら、古代から続いてきたものも再び調べ直して、またきちんと礼式として取り入れようという考えは持つておられたと思います。

そこで実は、先ほどから神道と仏教の話が出て来ますが、本日は事務局の方から資料としてアーネスト・サトウであるとか、シュリーマンの旅行など、お雇い外国人の旅行記に関する書籍や分類資料を持参して載っています、ここにないで私がコピーをしましたのは、シーボルトが『江戸参府紀行』というのを書いているわけです。

ご存知のようにシーボルトは長崎出島のオランダ商館付医師であります、それがこの文政六年二月十五日に出島を出て、七月七日に出島に帰るまでの旅の様子を記しているのが

『江戸参府紀行』なのですが、その際に実はシーボルトは生田神社に立ち寄っているんですね。

この生田神社に立ち寄る辺りの話は非常に面白いので紹介しますと、

（楠木正成公の墓所参拝後）それからわれわれは心地よい森につつまれた生田明神（Ikuta Mijozin）を訪れたが、その森の中にサクラやアンズの木と並木道が通じていて、その間には同じ間隔を置いて石灯籠が立っている。神社は一般には簡素を特徴としている。その主目的は、英雄・偉人及び一般の福祉に貢献した人々を追憶し続けることである。この祖国的な原始的神事は、こうした尊敬の仕方のうちにはつきりと現われていて、神と崇められた先祖の功績が、その土地のものの心に深く刻みつけられればつけられるほど、そうした神事はますます鮮かに先祖の墓の上に花を咲かせるのである。そして、その功績は今なお先祖たちの運命に寄せる同情や彼らに關係のあるすべてのものをよびもどすのである。それ故に、武器・絵画・詩歌・松の古木、要するに、このような人々にゆかりのあるいつさいのものが、これらの神社における驚異や崇敬の対象となり、誉れとなるのであるが、仏教徒にあつては、一連の奇形な仏像や数えきれないほどの他の品々を、形而上のものの具象化のために並べた

て、印度の仏事を行なう幸をまばゆく人目につく色彩で飾るのである。私は帝の御所のある土地に近づくにつれて、後年支那から伝来した仏教の寺院が少なくなっていくのに気づいた。上に述べた神道祭祀に根ざす種々の理由から、この生田明神でも名将の馬が実物大の石に刻まれて残っている。大きな神社の傍になおいくつかの小さい祠があり、各々の社には人氣のある偉大な英雄を祭り、種々の機会にその名を呼び、拝み、供え物をする。

私はここで、枝という枝に小さい紙切れを結びつけたいわゆるフジの木をみつけた。この小さい紙の紐を人々は好きな木の枝に結び、しかもわざわざ左手でするのは、むずかしいやり方で、いつそう大きい御利益を得ようとするためである。また、女性は幸福な結婚生活を願って、こういう紙の小さい帯をフジの小枝に結ぶということであるが、つぼみが短い花房となるか長い花房を咲かせるかで、運命を占うのである。われわれは海岸と岡本山の間を進み続けたが、大阪湾を望むそのあたりの景色はすばらしかった。

とシーボルトは『江戸参府紀行』に記していきまして、彼の感じた神道と仏教の違いもちよつと理解できるといふ感じがします。先ほど述べたようなことをシーボルトは来日して実感したので体験記として書いているわけです。シーボルトだけで

なく、来日した外国人たちの個々の旅行記には色々なことが出てくると思いますが、ここに書いていないことで参考までに申し上げました。

阪本 先ほど、シーボルトが出てきましたが、幕末の開港後に外国人が沢山来日するようになって、当然、外国人が来ると、神社へも参拝するようになって特に伊勢の神宮など外国人の参拝の問題が明治初年ごろから問題になってくるわけですが、矢野塾長さん、外国人の伊勢神宮参拝ということでは何か面白いお話はありますか。

神宮とお雇い外国人の参拝

矢野 最初に外国人が神宮を正式参拝したのは、明治五(一八七二)年十一月一日に大隈重信が連れてきたお雇い外国人とされていますが、これは英国の公使の書記官で明治三年に再度の来日したアーネスト・サトウ他六名です。しかし、神宮はこの時、外国人の参拝にどのような対処をしていたのか、非常に困ったとされています。

例えばまず勲章を持っているかどうか、というようなことで、連れてきた大隈重信には関して言えば、彼は現在でいうところの国務大臣にあたる参議という役職でしたから、これは勅任で御垣内参拝にあたって全く問題がない。では外国人

はどうなのだというので右往左往したわけです。結果として御垣内は駄目だと、御垣内の特別参拝ではなく、一般と同じく外玉垣御門外の拝所で参拝せよということで、日本人は皆それぞれ特別参拝していますが、連れてきた外国人は一般と同様の参拝をしています。

神宮司庁もしくは神宮文庫に当時の祭典課の日誌が残っているとありますが、七時に外宮を参拝して、九時に内宮、十一時に退出とあります。日誌では参集所で接待したという記録も残っていますが、以後も外国人が何人も参拝に来るわけです。灯台の機械を取りつけにきた外国人とか、著名な外国人も含め、割合と記録は残っています。

そういう関係で、伊勢では明治六年に「宮崎語学校」という英語学校が設置され、サンデマンという英語の先生を月給一五〇円で雇っています。

阪本 当時の一五〇円と言ったらすごい金額ですね。

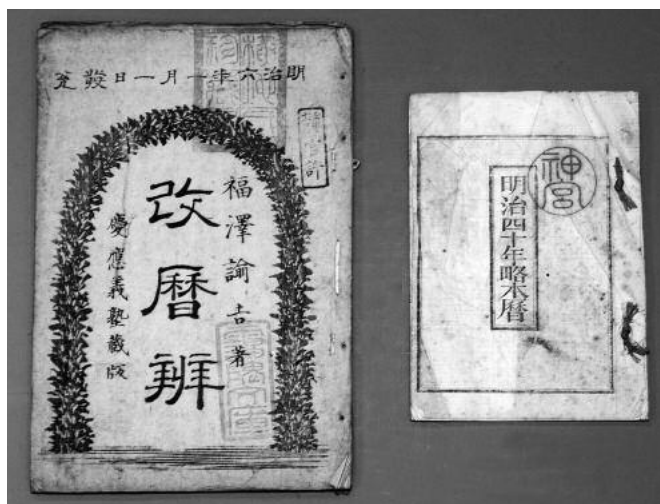
矢野 高かったんでしょうねえ。

阪本 神宮の大宮司の給料が、その頃、三〇円か三五円ぐらいですからね。

改暦と神社祭礼の変化

阪本 先ほど矢野塾長から大隈重信の話が出まして、彼は

当時としては非常にハイカラな人物でしたから、お雇い外国人を連れて神宮へ参拝したわけですが、大隈が関わった維新期の文化政策の一つとしては、神道文化全般、神社の祭りにも最も大きな影響を与えたいわゆる改暦が挙げられます。



福沢諭吉著『改暦辨』と神宮『略本暦』

改暦は明治五年十一月九日に太陽暦施行の詔と太政官布告が出され、明治五年十二月三日が明治六年一月一日になって太陰太陽暦からグレゴリウス暦、つまり太陽暦を採用します。福沢諭吉もそうですが、この改暦の政策は文明開化の最たるもので、政府首脳であつた岩倉具視や大久保利通が外遊中に留守政府を預かつていた大蔵卿の大隈重信が改暦を断行しました。その一年前の明治四年七月には、御師による神宮大麻の頒布も廃止しましたから、大隈は佐賀にいる母親から「今年には神宮大麻が来ないようだけれども、お前みたいな文明開化論者があんなものは迷信だからやめてしまったんではないだろうか」といわれて、大隈は母親に「そんな畏れ多いことはないんだ」というようなことを述べた、と高山昇翁が回顧されていますが、神宮大麻の頒布に関しても、御師の頒布から神宮から神社を通じての頒布ということに変化する。神宮大麻一つとってみても同時期に行われた改暦とともに大きく変化していきます。

また、改暦は特に神社の祭祀や祭礼に大きな影響を及ぼしており、伊勢の神宮の神嘗祭にしてもこの影響を受けて、最終的には明治十年代には今の十月十七日という形になるわけですが、当時の日本人の生活の一番の根幹、生活意識の中に根付いていたものが太陰太陽暦で、これが全く西洋的な太陽暦になってしまった。結果として明治四十年ぐらいまでは太

陽暦と旧暦との併用をしていましたが、最終的には国の方針として太陽暦で祭日を適用することになった。しかし、あまりにもおかしいので個々の神社では後に変更されていきませんが。

神社だけでなく、歴代天皇の年祭なども全て新暦に換算し直して、紀元節も天長節も勿論、旧暦から新暦に変更されたこともあつて今の祭日では全く季節感が感じられなくなつてしまつた。近世まで人々が感じていた祭りの実感と今の人が抱く祭りの季節感には統一性がなくなつてしまつたというところがあります。

文明開化の一番象徴的なものである暦の問題と、神宮も含めた広い意味での神社あるいは神道的な文化の変容、お伊勢さんのお祭りでも、新暦が採用されたため、夏にあつた祭りが変更になったり、旧暦と祭日とがうまく連動していたものが変わつてきたり、祭式の形式も神宮の明治祭式ができることによつて、今までの祭りとは違うものが創出されてゆく。あるいは、御師や社家の廃止等、広い意味での文明開化にどうしても遭遇して適応せざるを得なかったのが当時の神社、民衆でもあるわけです。

当時の人の日記を見ると、急激な変化に戸惑いがあることは事実ですね。有名な話ですが旧暦ですつと日記を書き続けていて十五日になつたけれども、月も出ないのに十

五日だというので、真つ暗闇の十五日ということで書いてある日記もあります。

一番典型的なのは、八幡宮のお祭りですと旧暦と新暦の八月十五日では季節感も違い、祭の在り様もまったく違つたものになつてくるわけです。一ヶ月祭日が遅れるだけでも全然違つたものになつてくる。祭日の変化というのは大問題です。祈年祭にしてもそうで、これは今も大事な問題だと思いますが、日本人の生き方、生活実感のようなものを変えてしまつた面もありますし、太陽暦の採用に従つて、いわゆる五節句であるとか、八朔であるとか、明治維新までの庶民階級までも含めた節句などが廃止されて、新しい祝日あるいは祭日が創出されてくるわけです。

これを神道文化といつていいか、あるいは、近代の新しい神社、神道に対する政策の結果といつていいのか、なかなかその評価は難しいと思いますが、いずれにしても古い行事は残っていますが、旧暦の行事が新暦の採用によつて一種、ちぐはぐになつてしまつた。ちょうど今は七月でお盆の時期にあたるわけですが、地方によつては、お盆を今の時期にやる地域、月遅れや、旧暦のままでやる地域、一ヶ月後のもの、あるいは新暦で今頃やつているという地域もある。わかりやすいお盆ですら何通りにも分かれてしまつた。

そういった民衆の民間行事、民俗行事も含めて、例えば、

神戸や伊勢あるいは横浜等で、先生方が何か御自身の目で見られて、あるいは歴史的に見られていた文明開化といえますか、近代化がもたらした光と影のようなところをお聞きたい。

今までの話の中では、どちらかというと進取の気風ということで、光の部分と言いますか、ある意味では一種仕方がなかったという面もありますが、何か失ったものの、今は残っているが、何かちぐはぐになっているという、ちよつと七夕のときなども、梅雨で天の川は当然、見えませんし、笹の葉も雨にずぶ濡れというような、だから仙台の七夕まつり、阿佐ヶ谷の七夕祭りなどでも一ヶ月遅れで、ほぼ立秋に開催している。

七夕一つとってみても、単なる文明開化だけでは推し量れない庶民の、民衆の生き方のようなものもあると思いますが、そこには仏教的、神道的な様々な長い歴史の中で培われてきた文化というのがまだ要素として残っていると思います。

加藤 先ほどの暦についてのお話から思ったのですが、神社の祭日も色々日時が変化しています。例えば、今、生田神社なんかで、例祭は四月十五日ですが、それが古くは、一の祭りといって八月二十日に行われていました。後に七月の晦日と改められて、兵庫の和田岬に神輿の渡御があったとされています。

この和田岬というのは、社伝によると、太古に神功皇后が

凱旋のときに上陸されたという場所で、昔から聖地とされていた場所です。それがいつかその祭りも四月三日となつて、明治十八年に生田神社が官幣小社に昇格しますと、例祭日が四月十五日と定められて、国から幣帛が供進され、四月十六日に神輿渡御が行われるようになります。

考えてみると確かに夏の暑い時期の八月では祭りをすることも確かに大変だったと思います。それで陽気の一番いい四月に変わつていったのかなと考えるのですが、それ以外にも何らかの理由があつたんではないかと思いますが、神社の例祭日もそうやって変わつていくということはいえますね。

阪本 改暦の影響としては神宮の場合はどうでしょうか。

矢野 まず伊勢暦が手に入らなくなつて各地の人々が困つたという話がありますね。それでどこかで暦を発行しなければならぬが民間では頼りないから、神宮司庁でやるということになるんですが、一般の人々は困つたと思いますよ。伊勢暦はかなり流通していましたから。

それと神宮の主要な祭りの大半が真夜中のお祭りですから、真つ暗闇の夜もお祭りをしなくてはいけなくなつて、本当に困つたと思います。

阪本 そうですね。明治五年の新暦の採用というのは、人々の生活に大きな影響を与えましたし、なおかつ今でも日曜日が休みというのは、西洋のモノマネ以外の何ものでもな

いわけです。

佐野 曆に関していえば神宮祭祀には、十二支に関わるものはなかったのでしょうか。

矢野 そんなにないですね。

佐野 他の神社では例えば十一月の卯の日というのがありますね。

矢野 明治維新以前は正月初めの卯の日に卯杖の神事とか二月の子の日に鎌山神事とありましたね。

佐野 その類だと新曆以降は月齢とは全く関係ない、ずれた祭祀になりますね。

矢野 確かに。

佐野 その点でいえば祭日は必ずしも満月だったり新月だったり、またちよつとずれてくるとは思いますが。

ところで、さきほどガス灯の話でしたが、十月三十一日は「ガスの日」なのだそうです。横浜の本町通り等にガス灯がついたのは旧曆の九月二十九日だそうです、これを新曆に直して記念日として馬車道の商店会などで毎年イベントを催しています。

阪本 曆だけでなく文明開化の影響、近代化の影響というもののをさらに神社に身近な話題の中で考えてみたいと思います。

近代神社制度の整備と氏子区域の変更

藤本 改曆もそうですが、先ほどの神宮の御改革の話にもあったように明治維新以降の神社制度が制定されてゆく中で神社での変化、そして受容、例えば氏子区域というのも明治四年七月の郷社定則、大小神社氏子取調規則やそれに伴う氏子札の作成などが制度として定められて、実施されていくわけですが、確か以前、別格官幣社として湊川神社が創祀される際に生田神社と湊川神社との間でいわゆる氏子引分がなされ、氏子区域の一部が湊川神社の氏子区域になったというような話を加藤宮司からお聴きしたことがあったのですが、近代化の波の中で、慣習的な氏子区域というもののが制度としてきつちりと定められていく中で、明治五年になって生田神社の氏子区域の中に新しく別格官幣社湊川神社というのが創祀されて、その点でいえば氏子区域を変更するといった問題なども生じてくるわけですね。地元の人々を含め、神社としてもその変化をどのように受容してゆくのか、その点について少しお伺いしたいのですが。結局は湊川神社と生田神社の二重氏子という区域があるわけでしょうか。

加藤 生田神社は旧八部郡やたべに属していて、八部郡はもともと生田、長田、敏馬神社かめめと三社しかなかったわけです。その

後、八部郡内にも神社がどんどん増えてくるわけですが、例えば、生田神社の氏子は非常に広い。やっぱり神戸の氏神さんですから。

神戸という地名も大同元（八〇六）年に『新抄格勅符抄』所載の「神封部」に「広田神四十一戸、長田神四十一戸、生田神四十四戸、並津国」とあつて四十四戸を賜つたとあり、公地公民制の時代、国家から封戸が神社に寄進された場合、これを「神戸^{かんべ}」、「神封^{しんぷ}」と呼んでいましたので、神戸が四十四戸あつたことが地名の由来です。だから、今の伊賀市の「伊賀神戸^{かんべ}」なんかは同様の考え方の地名です。神戸の地名の発祥がまさに生田神社なわけですが、その神戸の地が中世の湊川合戦で大楠公、楠木正成公が神戸でお亡くなりになられて、その地に梅と松が植えられ、水戸光圀公によつて「嗚呼忠臣楠子之墓」として、お墓として崇められたわけです。しかし、この明治天皇さまの御沙汰によつて、ここはお墓だけではもつたないから、湊川神社を創祀するよというということで、明治五年に別格官幣社の第一号として湊川神社が建てられるんですね。

ところが、神社は建てても氏子はなかったわけです。それはそもそものは崇敬神社ということで、大楠公の崇敬者だけでいいわけですが、やっぱり神社をお守りする、氏子区域というものが要だということで、湊川神社のある地は生田神社

のエリアで生田さんの氏子であるわけですから、それで生田さんの氏子をつつ楠公さんの方に差し上げることになつて、そして、今はない地名で「湊東区」と称する新開地以東、宇治川以西の湊東区という区域を楠公さん、湊川神社に氏子として差し上げようということで、氏子を引分したわけです。確かにもともとは生田さんの氏子区域ですね。

但し、その湊東区の奥平野村という区域は湊川神社が創建される当初は、湊川神社の氏子区域に編入されようとしたのですが、地元の氏子が反対して、明治四年八月から氏子区域復帰嘆願書というのを兵庫県に三度も提出して、最終的には湊川神社と生田神社両方の氏子となることで決着しました。

それから、逆にお聞きしたいのですが、生田神社に氏子札が残されていますが、他の神社でも結構残されていますか。

矢野 伊勢にもありました。古市町の久田家で見せていただいたこともあります。

藤本 結構残されていますね。例えば長野県の伊那郡や愛知県の知多郡、熊本県のそれぞれの氏子札を見たことがあります。形式も「産土神社氏子」と書いてあるものや「〇〇神社氏子何某」などとあるものなどそれぞれ若干違っています。戸籍法と併せてやったのですが、種々の事情で結局はうまくいかなかった。

加藤 そうですか。生田神社の氏子札の一例が昭和十五年

の社報で紹介されていますが、表には「産土神 生田社」という記載と「産土生田神社印」という丸印が押されてあって、そして、裏面には、兵庫県下神戸下組八幡町印の角印があって、それから、例えば、明治八年「兵庫県管下、摂州八部郡、神戸下組八幡町・安川文治郎 妻 こう 未二十八歳」とあります。総代家であった安川家の氏子証明書であったことがわかるものです。

森 氏子区域の変遷に関連して例えば、明治五年以降、湊川神社のお祭りと生田神社のお祭りをするとともに、何か齟齬をきたしたとか、そういうことはなかったのでしょうか。

加藤 そういうことはないですね。ただ、むしろ、生田神社はちよつと特殊な歴史的経緯があり、古来、生田神社の末社とされてきた「裔神八社」と称する、一宮神社から八宮神社がある。御旅所は別にありますが、神戸市の旧葺合区、旧生田区、兵庫区という非常に広い地域が生田さんの氏子地域で、全国的に見ても氏子区域としては非常に広い。それら八社には天照大神と素戔鳴尊の誓約のときに生まれ給うた五男・三女神、八神がそれぞれに祭ってあります。

だから、生田神社は、一宮神社、二宮神社、三宮神社というように八宮神社まである裔神八社と称した神社が氏子区域内にあります、それらの神社と歴史的な関係があり、それら八社ごとに生田神社と氏子区域が重なりあっているわけで

す。普通、一宮というのは国司が参向する神社で何々の国の一宮とかいいますが、生田神社と裔神八社のような例は他にあまりない。

森 湊川神社の鎮座地は裔神八社のうちのどの神社の区域に該当していたんですか。

加藤 あれは六宮神社が鎮座していた区域になります。楠寺という地区で明治四十二年十二月に楠高等小学校の建設に伴って現在は八宮神社に合祀されていますが。

森 今も氏子区域は変わらないわけですか。

加藤 歴史的にも二重三重の氏子区域になっていて、近世では争議まで起つたりしたわけです。昔はもともと八部郡に神社は三社しかなかったわけで、そこへ裔神八社などの神社が鎮座するようになる。最初は生田神社の神職が兼務のような形でやっていたが、現在では個々の独立した神社になっているわけですから、ゆえに今はあまり「裔神八社」、「裔神」というような言葉は使いませんし、それぞれが独立した神社としてやっているわけです。

森 地名や駅の「三宮」も三宮神社の「三宮」なわけですね。

加藤 そうです。摂津国の三宮ということではない。これは余談ですが、皇太子さまが神戸に行啓されて、その際に三宮駅長に「これはどういう意味だろう」と言ってお聞きなつ

て、駅長がわからなくて困ったという話があります。それで三宮駅長が聞きにきて、駅のコンコースで乗降客に教えて、一宮から八宮のお社について説明をしたことがありますね。天照大神と素戔鳴尊が誓約をした際の五男・三女神が、氏子区域に祭られているところはあまりないんじゃないかと思えますね。これは特殊な形だと思っていますね。

藤本 同じく近代化の中で神戸での神社に関する制度的な一つの事例として、先ほど申し上げたような湊川神社の創立と別格官幣社への列格、その中で生田神社からの氏子区域を引き分ける形で湊川神社が創立する事実が一つ挙げられる訳ですが、神戸においても横浜と似た事例として、神戸港でも生田神社の境内末社の小祠を砂子山に遷座して大神宮を創立したいとするような建言があったという記録も『太政類典』などに記されています^②。しかしながら、例えば、横浜の方に話を移してみると、明治三年に新潟港に設けられた大神宮の次に伊勢山大神宮（伊勢山皇大神宮）が設立されて、開港場、個々の地方における総鎮守的な役割の大神宮となって現代へと続いていくわけですが、横浜の伊勢山皇大神宮の場合は明治四年ですが、それは崇敬社みたいな形になるわけですか。先ほど阪本先生から補足がありました、少し佐野宮司にもお尋ねしたいのですが。

佐野 伊勢山皇大神宮という神社は、きちんとした神社史

が著されていないこともあって、詳細が公開されていないので歴史的、制度的にきちんとした話がしにくいですね。恐らく伊勢山という地を横浜の町の中の共同の神社のようにして、神職界全体でもって管理していくというような時代があったようです。

それで個々の小さい神社の氏神は氏神として、二重氏子みたいな状態で、横浜の総鎮守みたいな感じの祭り方が基本で本来の固有の氏子はもたない神社で、そこへ、かつ先ほど言ったように、居留地にしろ何にしろ、みんな埋立地だった。逆に言うと、もともと氏子でも何でもない土地がどんどん発展してまた氏子意識も薄いまま市内の人口が増えたこともあるものですから、氏子区域の概念が曖昧なまま年月が過ぎたところがあり、さらに近年になって近在の宮司不在社を境内社化したり兼務したりした複雑な経過もあり、あまり正確な話が述べにくくなっていると思いますね。

文明開化と華僑、神社との関係

加藤 文明開化と外国人ということに繋がる話としては、神戸の在日中国人の八割近くが参るといふ神社があります。これは神戸市中央区の諏訪神社という神社で、神戸の華僑が皆参る社です。中国人の好む赤に配慮したわけではないし

ようが真つ赤な鳥居や赤い総門があつて、扁額が中国語です。神社の中には赤い文字で一族の名を記した提灯をはじめ「答謝神恩」「恵我華僑」とかいた赤い板、「民国十四年」という書き込みもあり、中国的なものが沢山ある神社です。

この諏訪神社は参拝をするお賽銭箱のところに中国式の参拝をする「跪拝座」があるのが特徴です。つまり、中国人は足を折つてお参りするわけです。跪拝座は台湾に行ったらレザーが張つてありますが、諏訪神社はやはり日本的で畳表が張つてあります。また境内には紙銭を焼く「金亭」も設置されてある。これはどうも明治の初めの長崎と神戸の華僑の関係です。

佐野 明治に長崎から華僑が神戸に来たのがルートとは。

加藤 そこで面白いと思つてルーツを調べてみました。なぜここへ中国人がお参りに来るかといつたら、これは実は長崎にルーツがある。長崎には出島以来の中国との貿易の関係で華僑がいて、神戸華僑歴史博物館の藍瑛館長によれば、「どちらか海を一望できる山上に社殿があつて華僑は貿易関係者が多かったから、航海の安全を祈つたのではないか」としており、華僑がお諏訪さん、鎮西諏訪神社へよくお参りしていたわけです。²⁾

近代になつて、確かに貿易港としては日本屈指の神戸に移住してきた華僑が多かつたわけで、移つてきた華僑も非常に

信仰心が強いので、非常にロケーションの似た神戸の諏訪神社にお参りするようになったのではないかと考えます。神戸の諏訪神社は兵庫県庁から相楽園の西側をずっと北に行つて石段になつた参道、神戸の真ん中にある諏訪山に神社があるので、一〇八段の石段を上がつたところに諏訪神社があります。

長崎でお諏訪さん参つていた華僑が神戸へ移住して、同じ諏訪神社に参拝することが定着したのを、陳舜臣氏が「神社におけるコロニアルスタイルではないか」と言っています。これを道教研究の第一人者東京大学名誉教授の窪徳忠さんにお話したところ、非常に興味を持たれて、私は案内したことがあります。神社には中国人が掲げた額が沢山掲げられていて、賽銭箱の隣に跪拝座があつて、しかも、その座には畳が敷いてあるというのが非常に日本的だね。中国の人は紙銭をレンガで造つた「金亭」という炉で焼く。最初は焼却炉かと思ひましたら、そこへ紙銭を入れて拝むものだと思つて驚きました。長崎から来た華僑の風習が、今でもそれがずっと定着しているわけです。

もう一つは、これは先ほど少し申し上げましたが文明開化の所座かと思いますが、アーサー・H・グルームという、日本最初のゴルフ場、オリエンタルホテルなどをつくつた社長ですけれども、彼が六甲山に上がるのに、籠かきで六甲山へ

上がったわけ。そこでゴルフをやっていたわけです。

その時にキツネが六甲山によく出てきたので、グルームはキツネは日本の神様だということで、六甲山にグルームがお稲荷さんを設けた。六甲山にあるお稲荷さんはグルームがつくった祠のお稲荷さんです。これも非常におもしろい文明開化の所産ではないかと思えますね。

藤本 神戸の諏訪神社もそうですが、先ほどの話は文明開化や近代化のまさに一つの所産といえますね。

森 例えば、華僑の方が諏訪神社にお参りする際に協力した日本人や、神職、媒介した方がいるのでしょうか。

加藤 今、諏訪神社というのは私の一番上の姉が嫁いでいるところですが、その主人だった安部鷹男宮司は亡くなって、今は安部千之氏が宮司ですが、その祖父にあたる安部莊之助宮司が、非常に熱心で中国人に何とか神社信仰を定着させたということ。一生懸命教化活動をしていたわけです。だから、莊之助宮司は年にもかかわらず、英語や中国語を勉強していたという話を聞きますね。

今でも諏訪神社の赤い鳥居の奉納者は、全部、陳さんや劉さんや蔡さんといった名前で行くように全部中国の人が奉納していて、作家の陳舜臣氏も、神戸にきた際はあそこに必ず参拝されるといいます。それで本人自身も「神戸ものがたり」(平凡社ライブラリー)という本に「諏訪神社を華僑が

拝むのは、信仰面にあらわれたコロニアルスタイル」とかかっていますね。

もう一つ面白い話の一つとしてかつて沖繩の基地でも、日本を象徴するシンボルマークとして、鳥居を書いているのが多いですが、三宮には「トアロード」という道があります。神戸で一番センスのある道路を「トアロード」と言っていますが、その山手の道路の一番上にホテルがあつて、「トアホテル」というホテルがあつたんです。そのシンボルマークは鳥居だったんですよ。

それからその「トアロード」をずっと下がっていった、今は大丸デパートがあるあたり、さきほど申し上げた裔神八社の一つの三宮神社があります。この神社は西国街道沿いにかつて神戸事件が起こるんですが、そこに三宮神社の鳥居がある。

それで神戸の外国人は「トリイ (TORII) ロード」といつていた。その「」が抜けて、ドイツ語の門を意味する「TOR」ということで、それで「トアロード」となったといわれています。

だから、トアホテルの外人さんが泊まっているホテルは、鳥居がシンボルで、ぎゅと下った一番最後のところに三宮神社の鳥居があつて鳥居と鳥居を結ぶトリイロードが、トアロード、今はトアロードと呼称されています。

ところが、それが戦争中は敵性語というので、東亜道路というふうに書かれていた時代もあったわけですから。



大正期の御幸道路（座間神社提供）

鉄道・道路網の整備と神宮

藤本 ロードで思い出したのですが、矢野塾長さんにお伺いしたいのは、皇學館大学沿いの御成街道、御幸道路は昔は国道一号线だったという話を聞いたことがあります。国道一号线の終点は、神宮だったということでしょうか。

矢野 国道一号线は最初、皇居二重橋から宇治橋までと私は思っていたんですよ。確かに戦前はそうだったのですが、もともと古くは一の鳥居、火除橋が終点でした。終点が火除橋というのは当然です。あそこまでが館町で、内宮の入口の町の中でしたからね。そこが終点であつてもおかしくない。

藤本 確かに。

矢野 町中でしたからね。

藤本 それはどこかに何かに根拠になるものがあるわけでしょうか。

矢野 神宮司庁の管財課で地図を持っています。私は実際見ていませんでしたが、以前神宮禰宜を務めていた時期に財産管理の責任者から聞きました。

その名残は、さつきガス灯でお話した常夜灯の支柱が国道は石で神域が木製と区別してある違いでもわかります。

あの館町の御師の館、民家があつた付近が伊勢の文明開化の一番象徴的なものなんです。今は庭園になっている所、

あの庭は日本庭園だと皆さん思っています、あれは西洋庭園です。当時は西洋庭園だったんです。芝生を張ったでしょ。それから、ツツジの木なんかも全部刈り込んで、四角く角に刈り込んでありますが、あんなのは日本にはなかったんですからね。

藤本 それは逆に宇治橋の内側のいわゆる御師の館、宇治館町の街の建物がなくなつた中に、実は西洋的なものがぐんと入り込んできた一つの象徴になるわけですね。

矢野 当時の人は、そこに西洋を感じたんでしようねえ。何だかごちゃ混ぜのような感じがしますが。和洋折衷です。

藤本 昔の伊勢の風景写真を見ますと、神宮教院なんかも非常に大きな建物で、今でいうと伊勢市中村町の方から見て宇治の神宮教院本教館の建物が聳え立つように写っているような写真を見たことがあります、その意味では、非常に伊勢は文明開化の最先端の地の一つであつたという感じも致しますし、道路についても後で阪本先生に補足を戴きたいと思いますが、国道でも各起点となる都市の、文化的な拠点となる場所の近くを必ず通っていたりするわけで、道路網の整備というものは、神社においても文明開化の一つになっていくのかなと。

鉄道の伸長や道路の伸長というものはきちんと整備されてきて、その中で近代の観光産業、観光文化というのも勃興し

てきますし、先ほどの華僑の話ではないですが、例えば、京都で明治二十八年に「第四回内国勸業博覧会」が開催されますが、実はそこに既に亡くなつてはいましたが岩倉具視の建議が大きくて、現在の裁判官の服装であるとか、そういったものも黒川真頼という工部省、それから、内務省にもいた国学者が非常に関与しているわけです。現在の様々な文物、服飾や音楽についても国学者が関わってきますし、その意味では、一つの神道との関わりという部分にもなりますし、その点でいえば一番近代の国学者に詳しい阪本先生に国道の話なども含めて少し補足を戴ければと思います。

阪本 国道、道路と鉄道の話だと、道路の場合は現在では、自動車というものがないと成り立ちませんが、物資の輸送については、当時は自動車が発達していませんから、海運や鉄道からです。交通についてはそこから日本の近代化ははじまっているわけです。

最初、鉄道が中心になって、交通網が全国に張りめぐらされていきますが、神社仏閣を初めとして整備の過程が違いますので、まず道路から述べますと、法的にこれが道路だと言うものが決定したのは、先ほども申し上げましたが明治九（一八七六）年六月に太政官で「道路分類等級」が決定したのが最初ですが、その際に道路を国道・県道・里道の三種類に分けて、それぞれの道路を一等から三等に分類して、道幅

を国道は一等が七間、二等が六間、三等が五間と決定しました。例えば東海道や伊勢街道がこの時点で国道と決められたわけです。

そして明治十八年に国道を一号線、二号線と決定していくわけですが、その一号線の起点は日本橋です。今でもよく国道では日本橋まで何キロと書いてありますが、日本橋が起点になつていて終点がある。東京駅と同じで、全部下りしかないわけです。上りは日本橋へ向けてです。

その一号線からが最初は日本橋から横浜までです。次に二号線が名古屋まで行きます。その後一号線がずっと京都の方まで延伸して行きますので、それが今の国道一号線になります。そして、大正九（一九二〇）年四月に今の道路法の原型にあたる旧道路法が施行され、第八条で道路は国道・府県道・郡道・市道・町村道の五種類に区分されました。『大正九年三重県統計書』には、国道として二路線の記載がありますが、このときから国道は伊勢街道と出雲街道とかといった街道名を使わずに番号で呼ぶように変化してゆくわけです。三重県では東海道と伊勢街道が一号国道、二号国道とされ、旧道路法の第十条で国道の路線は、「一 東京市ヨリ神宮、府県庁所在地、師団司令部所在地、鎮守府所在地又ハ樞要ノ開港二達スル路線、二 主トシテ軍事ノ目的ヲ有スル路線」と定められ、一号国道は東京から伊勢の神宮まで、二号

国道が今の国道一号線にあたる路線です。つまりここで日本橋から伊勢の神宮に至る国道が国道一号線とされたわけです。先ほどの矢野さんの話はこの時点での話になるわけです。

さらに京都から山陰を通る国道九号線というのが下関までと決まりました。それとは別に三号線、四号線が東北の方へ向かつて行くわけです。しかし、昭和二十七年に旧道路法は廃止され、国道一号線は国道二三号となり、旧東海道に沿って京都まで国道一号線が新たに設定されたわけです。旧道路法では国道の路線として「東京市ヨリ神宮」とあるようにお伊勢さん、伊勢の宗廟を指すというのが第一に考えられていて、その意味で、ある種お伊勢さんが第一に考えられていたわけです。あとは、名古屋、広島、熊本といった鎮台で海軍・陸軍の軍事要所が考えられていました。

そういった道路の整備と同時に、鉄道の整備によつて神社仏閣がお参りするものが昔よりも増加してくるということ、これは矢野塾長の方が御専門でしょうが、先ほど申し上げましたように、あれは参宮急行線ができるのが明治二十年代、三十年代のことです。

矢野 御幸道路、いわゆる御成街道が完成したのは明治四十三年ですからね。この時点で明治天皇が御通りになるということのできた「御成街道」ですから、先ほどの話も併せて考えれば、その後、国道一号線の終点が宇治橋だったので

ないでしょうか。

藤本 先ほどの阪本先生の話から思い出したのは、伊勢に国鉄以外の何社もの鉄道が走っていたという事実です。

現在のように旧国鉄、鉄道省の路線であったJRと大阪電気軌道の子会社の参宮急行鉄道の路線にあたる今の近鉄大阪線（名古屋線）だけではなくて、昔は神都線と呼ばれた東京や大阪より早い日本で七番目にできた路面電車もあり、他にも参宮急行鉄道に合併された伊勢電気鉄道というのがあって、もう一線、外宮前の今のNTT伊勢志摩局の場所に大神宮前駅があり桑名や松阪から直通していましたし、それでも今では考えられないような路線数で、路面電車も約七、十五分間隔で通っていたという事実もあります。また二見にも国鉄以外に路面電車が延びていましたし、二軒茶屋には中



山線というのもあった。朝熊山の方にも朝熊登山鉄道線とケーブルカーが運転されていて、戦時中に休止させられたという話もありますし、戦前には二見浦にもロープウェイがあったと聞きます。さらには伊勢の路面電車は単線ではなくて伊勢



大正期頃の外宮前の様子（座間神社提供）

市駅から宇治山田駅までは一部複線でしたから、その意味では、文明開化後の鉄道の整備、発展というのはお伊勢参りとともに発展してきたということもあって、伊勢の鉄道整備は非常にお伊勢さんと深い関わりがあると思ったのですが、そ

の辺のことも矢野塾長に少し伺いできればと思いますが。

矢野 明治五年に天皇が伊勢行幸の際、船参宮で鳥羽へ来られ、その際にバッテリーという端艇、つまり小型の船に乗って二軒茶屋まで来られています。バッテリーというのはバッテリー寿司というのがありますが、ポルトガル語でボートという意味のようで、寿司がボートの形に似ているということ、京都大学の学生がバッテリーといい出したので、そう呼ばれたらしいのですが、明治天皇さまにしても船から馬車での来勢に変わっていきます。特に御成街道ができていくのはその象徴です。今思えば路面電車は残しておけば良かったのですが、私が高校時代までは実際に乗っていました。路面電車自体は神宮の参詣者を運ぶ目的よりも宮川での水力発電の余剰電力を使うということだったようで、路面電車の架線は一般家庭への電柱も兼ねていたようです。

阪本 伊勢の路面電車はいつ頃まであったんでしょうか。昭和三十年代ぐらいまででしょうか。

矢野 昭和三十六年の一月に廃止されました。

阪本 京都にも路面電車がありました、これが日本初の路面電車です。京都では先ほど藤本さんが述べていた京都で開催された第四回内国勧業博覧会の開催に併せて、明治二十八（一八九五）年の二月一日に開業しましたが、全廃されたのは昭和五十三（一九七八）年でしたね。

佐野 路面電車は横浜にも確か明治三十七（一九〇四）年に開業していましたが、やはり戦後のモータリゼーションの波で、昭和四十七年に廃止されました。近くの川崎をはじめ京都、名古屋でも路面電車は結局、車の増加に併せ、皆バスや地下鉄に変わってしまった。

先ほどの伊勢の路面電車の話で思いましたが、近代化と観光という面で見れば、小田原や熱海、それから箱根など観光地、温泉地に登場してくるんですよ。

阪本 日光へ向かう路線がある東武鉄道もそうですね。

加藤 路面電車が再び見直されて、松山や広島や函館、富山など残っているところがありますが、京都にも是非あったらいいと思うときがありますね。

というのは、観光地では全然車が動かなくなる。京都はバスが便利ですが、とにかく渋滞が酷い。やっぱり路面電車がええじゃないかというので、是非とも京都に路面電車復活をという運動を起こしている団体もありますね。これだけ自動車が多くなつて交通麻痺、渋滞をすると、逆にあの路面電車がよかつたんじゃないか、といったようなことを思ったりする人も多いと思います。お伊勢さんの路面電車はかつて私も乗ったことがありますが、「今あつたらなあ」と思ったりします。

藤本 確かに伊勢の路面電車については、国道二十三号線

のバイパスの通り沿いに昔、ここに駅があったという話を調査をした際に聞いたことがあります。楠部町のジャスコがある辺りですが、地元の人にも「あの辺にあつたんだよ」という話を聞いた際には非常に面白いなあという記憶がありましたので。

佐野 小規模な路線でいえば、今でも人気がある路面電車の類としては江ノ電ぐらいかな。

江ノ島の観光と近代

藤本 江ノ島の観光と近代のことについては森さんが詳しくですね。

森



私は江ノ島の観光と現代、近代の様相を研究していますが、広く近世、近代、現代にかけての社寺参詣の変化というものに元々関心があり、近世は御師、もしくは山伏と呼ばれる人が、神社に参詣に連れて行ったということが多いのですが、近代以降、神社、神職に関する制度が整備さ

れる中で、御師もいなくなり、どちらかというとお金儲けのようなことは良くないということで見直されて、宗教者と観光との関係が下火になってしまっています。

しかし、近代化の波の中で、御師のような職がなくなり、社寺への参詣のために人々を連れて行くということが、昔のようにではなくなる中であって、江ノ島の場合は、近代に海水浴が行われるようになって、神社参詣とは別の意味での夏の観光シーズンが勃興することで、観光客をうまく取り込んでいきながら近代では江ノ島の街が再生していくわけです。

私はそういう街の在り様に関心がありまして、そこで交通網の変化が如実に江ノ島の場合ですと関係してくるわけです。最初は島に橋が架かっていなかったもので、船や人の肩に乗って島へ渡ったりしていましたし、勿論、鉄道ができるまでは東京から徒歩です。徒歩か、あとは河川があるので船もありました。そのうちに人力車になって、馬車になって、鉄道が開通して、江ノ電も開業する。そうすると江ノ島へ観光客が行きやすくなつて、先ほど阪本先生が仰られたように、一種近代、明治の後期や大正時代には江島神社への参詣がまた盛り返してきて、観光として非常に活況を呈してくるというような動きがあります。

そのあたりの文明開化以降の社寺参詣の変化、「神社参詣から観光へ」といったらいいのか、そういった点で神社との

関わりで話を伺えればと思うのですが。近代化や文明開化にも広く関わる部分でもありますので。

文明開化と神社参詣

藤本 森さんの先ほど話に関連するものとして、阪本先生に鉄道省が出版した、『神もうで』、『寺まいり』の話を少しお聞かせ戴けると有難いのですが。

阪本 やはり、鉄道にしても、先ほどの路面電車にしても、京都が東京奠都の影響で都市機能が疲弊したこともあって、槇村正直知事の後を受けた北垣国道知事が産業振興の一環として、琵琶湖疎水で水力発電を行い、その電力を使って明治二十八年に日本初となる伏見―南禅寺間に路面電車を走らせたわけです。京都の人々は天皇さまが東京に行つてしまったことから、いい方としては何ですが「京都を第二の平城京にしてはいけない」というので頑張つたわけです。大阪や東京、伊勢の神都線などの路面電車が整備されるのは、いずれも明治三十年代の後半ですね。神都線は明治三十六年だったと思いますし、伊勢の参宮鉄道線は確か、津から山田（伊勢市）駅までが明治三十一（一八九七）年に開業したと記憶しています。話は変わりますが、今日は、明治三十六年に出版された池辺（小中村）義象²³という国学者の『摂河泉名勝』という書を

持参しましたが、この書は池辺が関西に行つた際に大阪と神戸をめぐる、大阪に着いたときの話を書いてあるものです。鉄道は既に明治二十二年七月に東海道本線が新橋―神戸間で全通してしまつて、梅田に着いて大阪市中に入る際に、まだ大阪は電車のことを「電汽車」といつていて、電汽車も馬車もなくて、人力車しかないという話がかけています。これからしばらく後に大阪に電車がでるんですね。

まず鉄道網の整備によつて非常に人々の往来が便利になつて、明治三十年代に出た紀行文だとか、江戸時代の名勝図絵みたいなのも多数出版されるようになります。神戸については、最初は明治三十（一八九七）年に鍋島直身という人が編じた『神戸名勝案内記』という書が出版されています。この書には生田神社も登場しますし、嶋津さんの御実家の兵庫の厳島神社も記載されていますが、これが神戸に関しては本格的な観光書の一つですね。素人が書いたものなら幾らでもあると思いますが、『摂河泉名勝』の場合、池辺義象という偉い国学者が書いた書で、この中でも生田神社や湊川神社のことなどが登場します。

こういった一種の袖珍本^{しゅしんぽん}みたいなもので、今でいうと『るぶ』の小型のガイドブックや旅雑誌を持つて旅行に行くように、『摂河泉名勝』のような小さい書籍を手を持つて旅に出て、それで観光地をめぐるというスタイルが明治三十年代

のこの時期からできあがつてくるわけですね。私の持つているこの『摂河泉名勝』は今は国立国会図書館にしかない本ですが。

ですから、この明治三十年代以降、鉄道網の整備によつて、観光産業が盛んになってくるわけですね。例えばお伊勢さんでも、まさに参宮鉄道、関西急行鉄道と国鉄、つまり官営鉄道とが料金や路線の争いをして、さらに値下げ競争して、弁当をつくつたり、特に年末年始などは値下げ競争をするんですよ。

それで「お伊勢さんに行こう」だとか、宣伝チラシやポスターに赤福を使つたりして、そして実際に観光客が伊勢に降り立つと、当然、先ほどの話のように、歩いていくのも不便だということで、路面電車が非常に便利なので、たとえばわずかの一キロでも二キロでも走らせるようになってくるわけです。

広い意味での、鉄道、路面電車は鉄道には入らないわけですが、鉄道の伸長というものは特に関東、関西の私鉄が、関西急行鉄道にしても、今の近鉄の前身の会社ですね。あるいは南海にしても高野山との観光、参詣との関係であるとか、近鉄は特に奈良や吉野の神社仏閣をめがけて鉄道網が整備されるようになりますね。

そういった鉄道網の整備が大体、明治三十年代後半から四十年ぐらいにはほぼ完成して、大正に入ると、ほとんど全国に

開通してゆくようになると、今日持参してきた昔の国鉄にある役所である鉄道院（のちの鉄道省）が『神もうで』を出版します。今日持参してきた『神もうで』については、同書が大正から昭和初めにかけて何回も出版されていく中で、一番古い版のものが、官制の鉄道院として大正八年に出版したものです。

この本を後に当時の出版社としては、日本で一番大手の博文館が版權を取得して出版するようになります。そして版を改版したものを鉄道省が再度出して、また博文館から出版するという形をとるようになります。

それと今のJTB、昔の日本交通公社ですね。いわゆる官の側でのツーリストビューローにあたる日本交通公社が大正年間になってから、『神もうで』、『寺まいり』を出版するようになります。

佐野 博文館は明治に印刷業、出版業で活躍した大橋新太郎さんのところですね。

阪本 そうです。

佐野 大橋新太郎は私の住んでいる金沢ともゆかりの深い人物でして、彼は称名寺近くの井伊直安邸を買いとり別荘にしています。それ以降、周辺の土地を買収し、工場誘致などの一方で観光開発や景観保護にも気をつかいます。称名寺の持つていた金沢文庫文書の保存のために鉄筋コンクリートの

建物を建設し、県にかけあつて、県の御大典記念事業として「県立金沢文庫」としてこれを維持運営させるとともに、さらに研究を進める端緒を開いた人です。

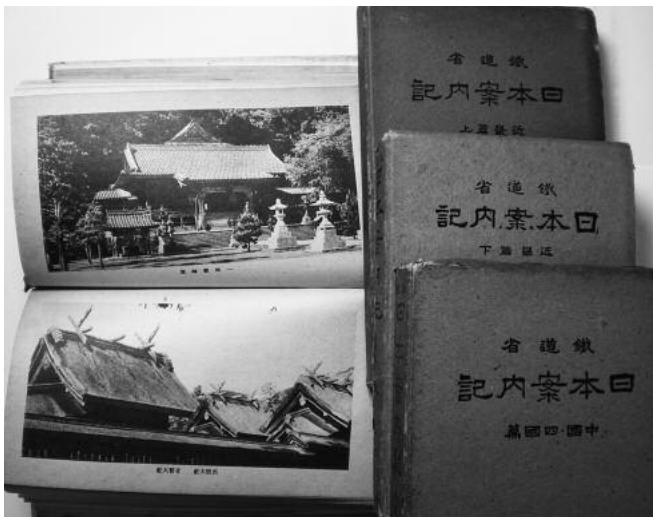
藤本 博文館の書籍は近代の本としては、よくみかけるものですが、そういう関係があつたわけですか。

阪本 だから、何かこういつた鉄道網の発展と、それからいろいろな神社仏閣めぐりというようなことが、実は出版活動にも大きく影響している。広い意味での文化の一つですね。出版によつて文化をより広く行き渡らせる効果があつたわけで、その旗振り役となつたのが明治時代であれば「金港堂」という出版社、明治から大正、昭和の初め頃にかけては「博文館」という出版社が色々なものを出版していくわけです。

藤本 これは私が持参したのですが、鉄道省が出版した『鉄道旅行案内』という書物です。これは先ほど阪本先生が仰つたようにやはり、本の末尾には、但し書きとして「本社は東京市小石川区戸崎町博文館に翻刻、発売させることといたしましたから、御利用の方は同館または一般書店にお求めください」として出版されたことが書かれていて、『神もうで』や『寺まいり』などと同様に絵図が掲載されています。この本は大正十三年の出版なので小田急が箱根へ新宿間に鉄道が開業する昭和二年以前ですから、私鉄でも小田急などは載つてはいませんが、春日大社や出雲大社の絵が載つていた

りして当時の人が全国を旅するには非常に面白い書籍ですね。同じように『日本案内記』というのも昭和の初めに鉄道省から出版されています。

佐野 私がいつも乗っているのは京浜急行ですが、京浜急



鉄道省発行『日本案内記』

行も幾つもの会社が合併して今のような会社になったわけだけれども、会社の元々の最初のは、川崎駅から川崎大師までの今の大師線にあたるところに明治三十二年に開業した大師電気鉄道です。これは、日本で三番目、関東では、最初の電鉄会社だそうです、やはり社寺参詣から鉄道網の整備が始まっていった。そして大橋新太郎が金沢文庫を建設している昭和のはじめころに、横須賀方面へ延びていつて昭和八年に品川―浦賀の直通運転が開始しています。

森 川崎大師のところは人力車の車夫たちが猛烈な反対運動を起こしたという記録があり、江ノ電ができるときも、地主さんのところに、度々抗議運動に行ったという話がありますね。

阪本 鉄道が物見遊山や参詣なんかで名勝の地などへ延伸してゆくというのは、京福電鉄の京都の嵐山線にしても、叡山線にしてもそうだし、全部そういった観光地と、それにまつわる神社仏閣との関係がある。この点、『鉄道日本文化史考』の宇田正さんなど観光文化史的なところから、最近研究している人が増えてきていますね。

森 旅館についても、先ほど述べたように、御師などが転業してなっている場合も多いと思います。江島神社で言うと、そういう旅館も勿論多い上に、例えば岩本院が「岩本楼」という旅館になって、近代では神職と旅館経営を兼ねてやつ

ていたりというのもありますので、日本交通公社のJTBが成立する背景には、恐らくそういう門前町の旅館のネットワークみたいなものというものも何かしらあったと思っています。

藤本 現在は観光地のホテルや旅館といえば、政府登録の観光旅館という名称でJTBとかの旅行社の看板がかかっている旅館という感じがしますね（笑）。

矢野 鉄道網の延伸についていえば、かつては内宮前まで汽車が開通する計画がありました。ところが、内宮の地元の町民が大反対するわけです。当時よく流布した話で全くの迷信なのですが、汽車が来ると病人がやって来るとか、伝染病がはやるとか。それから、煙を出すので皇大神宮を汚すと、それで反対してなかなか進まない。今だったら内宮のすぐ近くまでJRや近鉄が伸びていれば全然違うわけですが。

阪本 それは今の参宮線の方ですか。

矢野 参宮線の方です。

阪本 近鉄ではないですよ。

矢野 はい。

藤本 例えば伊勢のお隣の松阪の場合、松阪城の付近が街の中心部で盛えている地域でしたから、最初はそういう市街地の中を突っ切る形で鉄道を通そうという計画だったのが、地元の人が汽車は煙を吐くというので、色んな迷信、風評が

流れて煙をもくもくと吐くのは駄目だというので、当時としてはお城から離れたところに線路を持つてきたというような話を地元の人に伺ったことがありますね。

佐野 近鉄と呼称されるのはいつ頃ですか。昭和ぐらいですか。私鉄はどこも昭和に入ってから現在の名称になりますね。

藤本 近鉄の旧社名は関西急行ですが、これは大阪電気軌道とも呼ばれていましたね。確か、昭和十九年ですね。

矢野 神宮の場合は、遷宮を迎える度に交通網がどんどん発達してきましたしね。

藤本 そうですね。前回の遷宮のときにはちょうど伊勢自動車道が開通しましたし、サンアリーナも建設されて「まつり博三重」というのもありました。その前だと賢島への近鉄の延伸や三重国体などもありましたね。

矢野 建物もできたりしてね。みんな遷宮の度に整備されていきます。昭和四年の遷宮に併せて神都博覧会の跡地にできた近鉄の宇治山田駅も大正ロマンを残したモダンな駅舎ができましたしね。

佐野 今の宇治山田駅ですね。

矢野 そうですね。実際は博覧会が終わった後ですので遷宮から少し遅れて昭和六年のことですが、東武浅草駅の設計者でもある鉄道省の建築技師であつた久野節の設計で、三階建ての洋風建築の高架駅ですから「伊勢でも電車は高天原に

着く」と揶揄されるほどに当時としてはモダンな建物でした。

加藤 しかし、矢野塾長、伊勢で皆からよくいわれるのは、御成街道にある石灯籠の星のマークについて、日本人とユダヤ人との関係に引つ付けていろいろという人がいますね。

佐野 ダビデの星とかいわれますが……。

加藤 あれはどういう経緯ですか。

矢野 あれは単に西宮の石屋さんのマークですね。

加藤 石屋のマークですか。

矢野 ええ、日と月と星を組み合わせた石屋のマークです。

阪本 当初石灯籠については内宮、外宮と、伊雑宮までやる計画だったらしいですね。マークについては単純な話なんですけれどもね（笑）。

矢野 今上陛下の御成婚の記念として石灯籠を造ったのですから。それまで石灯籠は御成街道にはなかった。

藤本 シンボルマークでいえば、伊勢にちなんで福助とかの大手の会社のマークが文明開化の時期以降に決められたという話があり、特に伊勢と関係するものも多いという話もお伺いしたことがあります。

矢野 足袋のメーカーの福助の創業者がお伊勢参りに来たら、土産物屋で骨董の福助を売っていたんだそうです。それを買って帰って、これは縁起がいいというので。会社のマークにしたという話を聞いたことがありますね。

佐野 宇治橋に一番近い土産物屋か。あそこに福助みたいな人形が置いてあるね。

矢野 それは「岩戸屋」です。あれは新しい。福助の場合はたまたま伊勢参りの際に買ったのがきっかけといいますね。

藤本 以前、明治の頃に創業した会社の多くのラベル、会社の社章・マークに関する書籍を見ていたら、伊勢にちなむ会社が多いという話があり、福助もそうなんですが、いすゞ自動車もそうだという話を知りましたので。

森 話は変わりますが、最近の伊勢講は、どういう形態でしょうか。私は以前、山形の方に調査に行っていました。そこでも伊勢講が今だに幾つもある。先年のように愛知万博があつたりすると、そういった大きなイベント、行事に引つけて代参を出したり、代参ではなく実際に全員で旅行に行つたりするわけです。現代の伊勢講というのは、様々な交通手段を使うようになっていくわけで、実際どのような形で行われているんでしょうか。

佐野 伊勢講についてはまさしく今でもかなり残っているんですよ。実態というか量を把握していないだけで。

矢野 特別参拝や神楽殿で御神楽を挙げたりして継続している伊勢講は全部チェックしていますが、やはり減りつつありますね。残念なのは解散しましたといってお参りにくる講です。非常に残念です。

加藤 今、乗り物の話が出たことで、それに併せて一つの事例として述べておきたいのは、以前、国鉄などではお座敷列車というのがあつたんですね。実は、このお座敷列車に因む生田神社の生田講の講社が一つあります。それも神戸から随分離れた東北、秋田県に。何故秋田にいうと、ちょうど昭和三十四年に生田神社は戦災復興して神社の御遷座祭を行います。

その前に、実はお座敷列車で秋田に行く際に市内に土崎港というのがあり、秋田の次の駅である土崎という駅の近くにあります。そこに今はJRですが国鉄の操車場があつたわけです。昔は全国各地へ行くのにお座敷列車に乗っていったのですが、土崎の操車場でお座敷列車が停まって車両点検整備を受けるわけです。実はその列車に神社のお札が張つてあつたんです。それでその土崎操車場の国鉄の職員が、列車に生田神社のお札が張つてあると気付いて「これは何かの「縁や」と。

秋田というところは、土地柄なのか誰かれかまわず、集まったら「酒、酒」という感じのところがあり、「爛漫」や「両関」や「高清水」といった酒どころ、日本酒の旨い所です。その職員がお座敷列車のある一両に張つてあつた神社の神札をみて「これも何かの御縁や」と生田神社というお札が張つてあつたから、「どこのお宮さんかわからないけれども、

そして、これを土崎港の職員寮の床の間にお供えしてそれを話題に皆で一杯やるか」と。一杯やるかというのを、秋田では「もつきり」というらしいので、「もつきりやるか」といって、それでお酒を出して、職員仲間と乾杯をする。それが講じて「もつきりこう（講）」、というのができて職員仲間が仕事終わりにいつも一杯やる会にしていたようです。

そうしたら昭和三十四年に生田神社が戦災から復興の「遷座祭」を行うということで読売新聞にこの生田神社の遷座祭の記事が大々的に掲載されたわけです。それが秋田の方にもその記事が配信されていた。

そこで「もつきり講」の人たちは、これは今まで何の神社のことか、サッパリわからなかったのが生田神社という神戸にあるお宮さんだということがわかったので、その代表が神社の方へ照会してきた訳です。だから、もつきりというので、漢字を充てて「盛桐講」という生田神社の講が秋田にできたんです。それでこれは不思議な縁だから、秋田の国鉄の土崎の職員の方々は是非お呼びしようということで遷座祭にお招きしたわけです。

それから神社とのご縁ができて、それで生田神社の「もつきり講」という秋田の土崎の国鉄職員内でできた生田講へ一度ご挨拶に行こうというので土崎へ行くことになったわけです。土崎へ行った際には生田神社から来たというので大歓迎

を受けて男鹿半島に一升瓶をみんなで持っていて、秋田の人はそこでコップ酒をガーツとやって、また休んで、という感じで豪快な方が多いので凄まじい旅になったわけですが、それもお座敷列車の中に張った合ったお札が取り持ったご縁な訳です。

藤本 お札は神棚にお祀りするようになったんでしょうか。

加藤 そうですね。その後はきちんとお祀りされているようです。

近代技術文明の流入と神々への畏敬

藤本 先ほどののはたまたまお座敷列車の中にあつた生田神社のお神札がきっかけで講まで発展したというお話ですが、ちょうど文明開化によっていろいろ新しい文明の利器というのか、例えば、上下水道なんかも整備されたり、文明開化で鉄道や道路網なども整備されてきますね。

そういう中で、文明開化以前から自然に対しての畏怖、恩恵に感謝するという意味で引き続いているものとして考えられるものの一つに、後々戦後になつては問題になるわけですが、例えば、鉄道の駅の中に列車の安全運行にと、神棚を置いて祈願するとか、上水道であれば、浄水場のところに水神さんの祠を設けて龍神さんや貴船のお神札をお祀りしたりと

ということが起きるようになります。浄水場などは、かつては井戸に対して井戸の神様にお供えや感謝の念を捧げるための民俗行事というのがありますが、その意味で新たな文明が流入して来る中で、一つの近代の技術文明に対する恐れというのか、畏怖の念が小祠とか神棚という形で繋がってくるのではないかということを感じるわけです。実は、その近代の技術文明とそれを畏怖、畏敬することが神祀りと関係するようになる原点がどこになるのかなあということも感じるわけですが、その意味では、先ほどの加藤宮司のお話は参考になるようなお話だったような気がします。

加藤 神戸の三宮駅では必ず駅長以下が毎月一日に生田神社へお参りします。これは戦前からで、今でも続いています。

藤本 安全祈願の一環という形ですか。

加藤 そうです。これは交通安全や業務繁栄ということで、必ず毎月一日に月次祭に合わせてですね。三宮駅と今は元町駅も必ずお参りにきますね。

阪本 交通安全のお札やお守りが一般化するようになったのはいつ頃からなんでしょう。か。どうでしょう。か。昔、お札や護符文化のことについて座談会を神道文化会で開催しましたが、護符や神符守札については御専門の嶋津さんからは何か一つどうですか。

嶋津 交通安全については古いものはあまりありません

ね。鉄道なり、自動車が普及してくる過程で交通安全のお守りというのが増加しているように思いますが。

森 交通安全のためのお札は、古いものは見あたらないと思いますね。

嶋津 そもそも旅行が大衆化したのも近世後期なので、近世でも道中安全というお守りは見たことがないですね。

藤本 近代化と神社のお札というのは、それだけでも一つの大きなテーマだという感じもしますね。

佐野 私がよく神道教化に引つ掛けていう「授与品神道」になっってしまうから（笑）。

嶋津 そもそもは「御守」というだけで、本当は色々な願いを全部含めていたものだったんですね。それが「学業成就」だとか、「交通安全」だとかといたように、現在ではほとんどんんん細分化されていくわけです。

佐野 その点でいくと交通安全と学業成就の御守はどっちが先になるのかという点も気になりますね。

藤本 生田神社では旅行安全御守がありますね。少し話が逸れてきているような気がしますので、佐野宮司さんにもう少しお伺いしたかったのは、横浜と神戸のはじめて物語ではないですが、先ほど座談会の最初の方で横浜と神戸どっちが先だとか、というお話があったかと思いますが、そこで先ほど佐野宮司からキリンビールの発祥が横浜であるという話が

あつたと思いますが、キリンビールに因む神社というお話をもう少しお話戴ければと思います。

日本のビールの発祥と神社

佐野 話をする程の由緒があるわけではないのですが、横

浜市中西之谷町にある皇太神宮（北方の皇太神宮）の松橋宮司にも聞いてみました。北方の皇太神宮自体は、昔はもともと北方村の泉谷、現在の千代崎町という地に鎮座していて、その千代崎町の氏神さまでもありますが、山手の地で山からは湧水が出ていたそうで、その湧き水を使って明治五年に米国人のコーブランドがビールを醸造したのが日本のビールの最初、「天沼のピアザケ」であつたということだけです。⁽²⁶⁾そのため、キリンビールは当初千代崎町（天沼）に工場がありました。その後、皇太神宮自体も横浜開港後の慶応二年から四年までの間に居留地が整備されてゆく過程で社地が外国人居留地に編入されることになってしまい、明治三年にやや南の現在の社地へ遷座することになってしまったため、互いが繋がるような由緒といえは実はそれぐらいしかない。その後、キリンビールがそうした由緒から大正二年八月に神社へ灯籠を奉納したというぐらいで、工場跡は現在、キリン公園という公園になつていて「麒麟麦酒発祥の地」という顕彰碑と隣

接する小学校の中にビール醸造に使った二つの井戸が今も残されているだけです。小学校と公園のあつた場所がキリンビールの工場のあつた場所で、附近には英国陸軍音楽長であつたフェントンが滞在し、薩摩藩士たちに吹奏楽を伝授し、「君が代」を演奏したとされる「君が代」の発祥地という妙香寺があります。日本吹奏楽の発祥の地ともいわれますが。

藤本 横浜の山手がビールや君が代の発祥地であるというのは私も聞いたことがあり、確か、輸入ビールは五〇本で一〇ドルであつたという記録もありますね。ビールの醸造は『横浜市史稿 産業編』によれば、明治五年にアメリカ人のコーブランドという人が山手天沼に開設したスプリング・ヴァレー・ブルワリーが最初であつたとされています。それ以前に山手四六番地にジャパン・ヨコハマ・ブルワリーという醸造所があつたという記録もあり、開業は明治二（一八六九）年でしたが、明治七年には廃業してしまい、結果的にコーブランドの醸造所が明治十八（一八八五）年に創設されたジャパン・ブルワリーに引き継がれ、この会社が現在のキリンビールの起源だといわれています。品川でも明治二年に土佐藩邸の一面でビールが醸造されていたという記録があります。試飲用で製造販売ではなかったようで、その点では日本のビールの発祥は横浜です。山手の湧水が良かったようでビールの醸造に適する硬水が出る場所だということでビールの

醸造が始まったといわれています。

確か、明治二十（一八八七）年に洋式水道が横浜にできますが、横浜の水が芳醇で赤道を越えても腐敗しないので外国船に珍重され、その水を「黄金の水（金水）」、港が「金港（ゴールドenポート）」といわれ、神戸の水も良質で水質の硬度が六甲山の花崗岩から湧き出るので高く、酒の醸造に適するといので、横浜の「金水」に対して「銀水」、港も「銀港（シルバーポート）」と呼ばれていたといえますね。

佐野 横浜開港資料館や神奈川県立博物館で企画展示をやっていたと思いますが、私は展示を見に行けなかったのでもう存じていない部分がありますが、確か去年の夏に日本のビールの発祥に関する展覧会をやっていたと記憶しています。その資料を手元に持つていないので詳しくはお話できないですが。横浜都市発展記念館でも展示をやるみたいですね。

加藤 ビールに関係があるかどうか、同じ炭酸水ということではラムネというのは、神戸が発祥ですね。日本初のラムネは「布引サイダー」というもので、六甲のおいしい水ではないですが、神戸は割合、昔から良質の水が出る地で六甲山系から良質の水が湧く。だから、灘の酒というのは、宮水といつて六甲山系の硬水が非常に醸造に適していたんですね。

それで日本三大神滝とも呼ばれる布引の滝がある場所か

ら、水を汲みだして炭酸水に砂糖を入れて、それをあのラムネの玉を考えて、ラムネを売り出した。あれは最初レモネードといつていて、レモンの味がするものから、レモネード。それがラムネと呼ぶように変わつていったわけです。

だから、ラムネというのは、玉が中に入っていたから、あれはレモネードがラムネになった。そして、最初日本人は、あれを神戸の方で「ボン水」といつていた。ポーンとやつてそれで飲んだからボン水といつていて、ラムネというのは神戸から起こったんですね。つまり、外人がレモネードといつていたのがラムネに変化したわけです。

藤本 レモネードが変化してラムネという話から思い出しましたが、ローマ字のヘボン式を作った明治学院大学の創設者のヘボンさんというのは、横浜にも関係深い宣教師で翻訳者ですが、ヘボンさんというのは、本当の発音や綴りではなくて、さつきのラムネとレモネードの関係と同じように「ヘイブンス」さんだと聞いたことがあります。ヘイブンスさんが日本式になまつて「ヘボン」なんですね。

阪本 ヘイブンスともいいますが、もう一つ別の読み方をすると、ヘップバーンさんですね。

加藤 そうですね、ヘップバーンともいいますね。オードリー・ヘップバーンというのは、日本式にするとあればポーンとなりますね。

藤本 オードリー・ヘップバーンもその意味ではオードリー・ヘボンさんですね（笑）。ちよつと話が逸れましたが。

阪本 しかし、文明開化と神道文化という括りは余りに広いテーマなので、なかなか難しい。神道文化と言つても、日本人の生き方、文化そのものですから。

加藤 誰がこんなテーマを選んだのか（笑）。

佐野 神戸と横浜と伊勢という地の対比としては面白い。

近代化と神社神道の未来

阪本 最後にお一方ずつ、近代化と神道と言いますか、あるいは、神道を中心とした文化で、何かこれだけはお話ししておきたいというようなことがあれば、是非最後にお伺いしたいのですが、最後に加藤宮司からどうでしょうか。

加藤 神道文化という考え方からいけば、世にいう国際交流は文化交流の一つとしても考えられますね。例えば、神功皇后が三韓遠征からお帰りになれた際に、生田神社が創建されたとされていますが、例えば神戸は酒造りで著名な地ですね。今は灘が有名ですが、これは既に平安時代の延喜式の巻第二十一の「玄蕃寮」という外来の仏教や外交をあつかう官司の規定の中に、新羅の使者がきたら「敏売崎」と「難波館」で神酒を賜れという記事があり、大和の片岡神社、広田

神社、長田神社、生田神社から、米の稲束を五十束ずつ集め二百束にして、そして、生田神社の神主が生田の境内で酒を醸したものを敏売崎で新羅からの来た使者に振る舞ったんですよ。

これは一つには、お祓いの意味もありますが、そうではなくて、生田神社で酒を醸して、新羅から来た要人に酒を振る舞いもてなしたという事実も大事です。神社も関わった国際交流というのか、そういうものが古代からあって、神戸はそういう土地柄なので近代になつても神戸で神社のすぐ門前に居留地を開いたということにも繋がるわけですね。

そういう種々の事例があつたわけですし、それから、先ほども少し触れましたが生田神社にはかつては高灯籠があつて、それをシルビア号という船に乗っていた外国人が絵を書いていますが、生田神社の高灯籠をまず書いて、これが世に外国船が来たりするのを目立って灯台の役目をしたというようなことを書いているわけです。先ほどのシーボルトあるいはフランク・ロイド・ライトもそうですが、外国の文化を受け入れてうまく消化してゆく素地というのが神社、神道にはある。だから、何か神道というのは、保守的な頑迷なものだけではなくて、国際交流にも昔からそういうものがあつたし、非常に門戸の広いものがあつたということを、私はつくづく感じるわけです。



阪本 どうもありがとうございます。矢野塾長から。

矢野 本年春に百日間の地球一周の長旅から帰ってきました、皆から「感想を」と、よく尋ねられるのですが、聞かれてもその感想というのがなかなかいえないのは、私が歳をとり過ぎたのか、それとも感動が薄かったからなのか、自分の本当の心情として滲み出るような言葉が全然湧いてこないからなんです。

戦後初めてハワイへ行った方が帰国してきて来て、同じように皆から感想を聞かれたんです。そうしたら、「向こうには外車がいっぱい走っていた」といったそうですが、私も世界一周から帰ってきて思ったのは、当たり前のように確かに日本の車がどこへ行っても走っていたということですね。しかも日本車はなかなか故障しない（笑）。

さらにはその旅行中に「日本人はまじめな民族だな」と、ケニアの青年が私にいましたが、それは「神様が見てくださる」という精神でもって、伊勢の御神宝を作るような気持ちでもって手抜きせずにやるという、そういう日本人のモノづくりに対するクラフトマンシップが生きているからだと思っただことです。

それと、明治維新では海外からの様々な文化、文明を取り入れましたが、それをそっくりそのまま向こうのものを取り入れることをしたわけではなく、日本の風土に合わせたもの

にうまく作り替えていることが挙げられるのではないかと思
います。

その一例が、私は伊勢の倉田山の神宮農業館の建物だと思
います。十年ほど前に再建されたわけですが、農業館は西洋
の小屋と宇治の平等院の鳳凰堂とミックスさせて、日本的な
建物にしている。また徴古館は東京の迎賓館と同じに設計さ
れた西洋式の建物ですが、元の赤坂離宮の建物といっても、
それなりに日本の文化に合わせて建てたところがまさに日本
の風土に合わせたのではないでしょう。

内宮の宇治橋を渡つてからの庭園もそうですが、西洋式庭
園であつても、松の木を庭に添えることによって、何だか日
本的なものを醸し出しています。神宮の境内の中の庭ですか
ら、風土に合わせて神道精神を忘れずにかたくなに守ったん
だと思います。

阪本 最後に佐野宮司からどうぞ。

佐野 あえて先ほど地動説と進化論といいましたが、それ
と同じ構造の中に、利息をとるという概念、金を貸したら利
息をもらうという、これは今でもイスラムでは利息は罪だとい
う大前提があるんだそうですね。

シェークスピアのベニスの商人にしても、利息をとるのが
ユダヤ人の悪徳だという一方で、利息をとるといふことは、
さざれ石も巖になるといふ精神と必ずどこかで繋がっている

のではないでしょう。元々、日本が島国で離島という問題
もあります。歴史的には、つまり、物事が生成発展してい
くということ肯定的に認めている精神といえますか、その
ような思考形態が日本人の古来の中にはあつて、その精神を
背景にして、文明開化というものもうまく消化していく力の
一番大本になつていふと思うんです。

ただし、一方で、物事は何でも発展していくんだと、拡大
再生産優先だという考え方だけでは、今の環境問題や人権問
題等の中では通らない部分も出てきている中で、二十一世紀
の神道文化のあり方というものを、難しいけれども整理
していくような、そういう時期が来ているのかなというこ
とを、最後だからといって訳のわからない話にしておきま
す(笑)。

加藤 私はつい最近までちよつとアメリカに行つていまし
たが、アメリカでも日本車は本当に故障しないし、製品がい
い。だから、車は日本がトップになつていくわけですが、こ
れは世界のいろいろなところ、よいもの、そういうもの
を模倣しながら最高のものをつくっていく。

しかも、それはどこでも誠実に、本当にすばらしい技術を
持つて、異国から入つてきたものを同化して、それを最高の
ものにしていく。これは日本の私は素晴らしい特色だろうと
思うわけです。

雅楽舞楽にしても外国から日本に入ってきた文化の中でも色々な文化が皆、原点である国では失われてしまったものが多い中であつて、日本がちょうど文化の掃き溜めみたいになつて、それが最後、花咲き結実されて残つているということが大事ですね。さらにいえば茶道にしても、海外から流入してきたわけですし、種々の芸能にしても、文明開化の後にも残つているというのは、これはある意味日本文化の良さじゃないかと思ひます。

阪本 最後に日本文化の良さと未来に向けて神道文化をどう形成していくかというような話でしたが、ふつつかな司会で、また加藤宮司、矢野塾長、佐野宮司のお三方とも、それぞれ親しいということもありまして、何かざつくばんな話になつてしまいました。本日は加藤先生も矢野先生も遠いところから御足労を願ひまして、長時間ありがとうございました。

日時 平成十九年七月十七日(火) 午前十一時～二時
場所 國學院大學若木タワー8階 神道文化学部神道資料室分室

註

- (藤本頼生作成)
- (一) 幕末の開港地については、日米和親条約の締結により安政元(一八五四)年に下田、函館が開港され、英・露なども次々

に条約を締結した。次に安政五(一八五八)年に日米修好通商条約が締結され、蘭・仏・英・露ともに締結。この際に既に開港していた函館(箱館)以外に神奈川(實際は横浜)、長崎、新潟、兵庫(神戸)が開港することとなった。この際に下田を閉鎖した。神戸港の開港は實際には慶応三(一八六七)年五月に勅許があり、同十二月七日に開港した。当初は兵庫港と称したが明治二十五年に勅命により正式に神戸港となる。神戸港は日本三大旅客港の一つ。横浜港は日本三大貿易港の一つと呼ばれている。

(2) 他に明治維新时期十年頃の我が国の諸風景を映した写真としては、武部敏夫・中村一紀編『明治の日本 宮内庁書陵部所蔵写真』(吉川弘文館、平成十二年十一月)がある。

(3) 鉄道の敷設については、明治政府が明治二年に鉄道建設を決定、同三年三月に新橋―横浜間が着工、同五年(一八七二)五月七日に品川―横浜間が仮開業し、同年九月十二日に新橋―横浜間が開業、明治十年には大阪―京都間が開業した。新橋―神戸間の東海道本線が全て開通したのは、明治二十二(一八八九)年七月一日であつた。中央本線の名古屋開通は明治四十四年、東北本線の青森開通は明治二十四年であつたから、明治十年当時はまだまだ鉄道は未整備であつたといえよう。

(4) 明治九年七月二十日、明治天皇が東北巡幸より灯台視察船「明治丸」にて函館経由で横浜に着御。「海の日」の由来。

(5) 理髪店の発祥は元治元(一八六四)年に横浜ホテルで開業した外国人フアーガスのヘアサロン「ヘアー・ドレッシング・アンド・シェイヴィング・サロン」が最初であり、日本人では明治元年に西洋理髪の本サミの使い方を学んだ小倉虎吉、松本定吉によって開業したのが最初といわれている。これは明治四年の断髪令の前であった(『特集横浜中華街』『NHK 知るを楽しむ なんでも好奇心』二〇〇五年四月―五月号)。

(6) フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright・慶応三(一八六七)年六月八日〜昭和三十四(一九五九)年四月九日)は、アメリカ・ウインズコンシン州生まれの建築家。特徴的な設計形式からその作品はプレイリースタイルとして知られる。近代建築、都市計画などで名を馳せたル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエらと共に近代建築では三大巨匠と呼ばれており、日本での設計作品には帝國ホテル本館(現在明治村に移築)、自由学園明白館、山邑邸の作品がある。

(7) 生田神社は明治五年に縣社に列せられ、明治十八年二月十日に官幣中社に列せられた。明治七年には祠官が後神秀熙から後神秀運へと交替しており、明治十八年五月の官幣中社列格

に伴い、同社禰宜となった後、四十四年六月から大正三年七月まで宮司を務めた。後神家は生田神社のいわゆる社家であった。

(8) 明治七年にガス灯がついたのは神戸では居留地のみであって、神戸で一般家庭にガス灯が灯ったのは、ガスが居留地以外に供給されるようになった明治三十四年のことであった。一般家庭ではむしろ明治二十一年に神戸電灯により開始された電灯が一般家庭には普及していた。フランク・ロイド・ライトの来日は明治三十八年のことなので、その点でも整合性がある。

(9) 「元町点描」『毎日新聞』平成十三(二〇〇二)年四月二十八日。居留地は一番地から一〇九番地までが文久二(一八六二)年までに外国人に貸与された原居留地と、現在の中華街にあたる市域、つまり横浜新田を埋め立てた一二番地から一七三番地までの旧埋立居留地と、明治になって造成された新埋立居留地(現在の横浜公園を含む)の三区域に分けられていることが明らかとなっている。この点がフランス人技師のF・クリベが慶応元(一八六五)年三月に作成した『横浜絵図面』にも明らかである。横浜の「関内」という地名は居留地が長崎の出島のように水に囲まれ隔離されていたこともあり、その出入りを監視する関所が設けられたこともあり、関所の内側という意味で「関内」という地名が生まれたと伝えられている(横浜開港資料館編『横浜・歴史の街かど』一八―一九頁)。

(11) 横浜にガス灯が点つたのは明治五（一八七二）年九月二十九

日、神奈川県庁と大江橋の近くから馬車道の本町通りにかけて十数基のガス灯が点つたとされる。このガス灯を設置したのはのちに高島易断で著名な高島嘉右衛門ら日本社中であつた。明治三年九月にドイツのシュルツェ＝ライス商會がドイツ代理公使の後押しで神奈川県にガス灯新設の免許申請を行っているが、その際に高島嘉右衛門はガス灯建設の權益が外国人の手に渡ると國益が損なわれるというので、ガス灯建設を日本人の手によつて行おうとした（持田鋼一郎『高島易断を創つた男』）。

(12) 神宮司庁蔵浦田長民史料「府県並開港場へ神宮遙拝所ヲ建シ事ヲ乞フ儀」によると（『神宮・明治百年史』）

府県並開港場へ神宮遙拝所ヲ建シ事ヲ乞フ儀

府県並諸開港場ニ新ニ神宮ノ遙拝所ヲ造営シ社格ハ県社トス地方長官群吏ヲ率テ之ニ奉仕シ、地方創新ノ御布令、其余重大事件ハ之ヲ神前ニ於テシ、務テ鄭重ニ存シ、下民ニ祭政ノ一ナルヲ示ス。是方今最第一ノ要件ニシテ、此風一たび開ケバ、下民ノ方向大ニ定リ、宣教ノ御趣旨モ自ラ貫徹シ、勞セズシテ外教ヲ防ニ足ルベシ。是省中同日夜御討論、敢テ之ヲ録シ廟議ヲ乞フ

とある。浦田長民は明治五年七月に神宮少宮司に任じられるとともに近代化に伴う種々の変化のなか神宮の信仰護持の

ため様々な施策を実施した。

(13) 神宮司庁編『神宮史年表』（戎光祥出版、平成十七年三月）。

(14) 神社にガス灯や電気灯を設置することについては明治四十年代頃に既に各官國幣社で行われていたことが『神社協会雑誌』の記事でも明らかとなっており、京都の八坂神社でも三基のガス灯が明治四十五年には取り付けられていたことが知られている（後掲資料）。またこの瓦斯灯や電気灯の設置については議論があり、電気灯を氏子の寄付で沢山設置していた諏訪大社の森村正俊宮司が弁明をしている。神社局側としては神社は歴史や伝統を重んじるのであるから、建築の調和なども含め、古式に則り文明の利器を利用しない方がよいという意見が塚本参事官（のち神社局長、荻野伸三郎嘱託から示されている。確定はできないが、こうした議論も影響して、後に官國幣社、諸社に設置されたガス灯の撤去に繋がつていったのではないかと推測される。以下関係箇所を紹介しておきたい。

『神社協会雑誌』大正二年二月十五日、三月十五日 第十二年第二號、第三號

『宮司談合會速記録（三）・（四）』（抄）明治四十五年六月七日（金）午前九時二十分～午後六時二十五分

○塚本（参事官） 神社の建築に付ては、御承知の伊東工學博士が熱心に研究して御居でなるので、それで彼の神社協

会雜誌で御覽の方も多からうと思ひますが、博士は明治の理想的神社建築を考へて居らるゝ趣である、神社建築のことは余程専門學者の研究に待たなければならぬだらうと思ひますが、私共専門の知識を持たないものとしても、唯今御尋ねのやうな、社殿に電気燈を附けるとか、或は御屋根を銅葺にすると云ふやうなことは、余り體裁の良いものではあるまいかと思つて居るのであります。銅葺のことは萬已むを得ずとして、又招魂社の如き既に銅葺で出来て居るものもありませうし、改に當つても色々な關係で元の形を存しなければならぬと云ふこともありませうけれども、避け得べくんば銅葺は避けたいと思つて居る。電気燈も先般何でも信州の諏訪ですか、電気燈で拜殿に「イルミネーション」をやつたと云ふ話を聞いて居りますが、事實の如何は保證し兼ねますが、兎も角さう云ふ話もある是の如きは最も「ハイカラ」で、社殿に似合はしからぬことに考へて居ります。電気燈の如き文明の利器を利用しないと云ふことは如何にも時勢遅れの考のやうでありますけれども、御社殿に於ては最も古式を貴び、如何にも古式を帯びて、昔が偲ばるゝと云ふのであつてこそ、始めて神々しいのであらうと思ふ。文明の利器を利用しないと云ふことは、神社にあつては遅れた考でなからうと思ふ。先づ電気燈の如きは私共の考つとしては適應しない、調和を得ないものと信じて居ります。之に付ても御社殿に或は姿鏡を置く

のがあつたと云ふことも聞いて居ります。或は柱時計の大きなのを懸けてあるのもあると云ふこと、是も参拜者の姿勢を正し、参拜した時に裝飾の如何を知ると云ふことに便宜はないではなからうかと思ひますけれども、社殿の全體の調和の上に宜しきを得ないものかと思つて居ります。(中略)

○保科宮司(八坂) 只今電気燈の意見がございましたけれども、或は境内の模様によつたらば、附けた方は宜いと云ふ者もあるので、現に私共の方で瓦斯燈を三基程附けて居ります。私の方は随分末社も沢山あつて、賽銭箱を盗まれたことなどがあります。のみならず甚しきになりますと花柳街が近いから男女の密會をやるに云ふやうなことをやつて居る。それだから不夜城のやうに夜も晝も明るいやうにして置く方が、神社に取つては宜いと云ふこともありまますから、其處は御承知を願ひます。

○森村宮司(諏訪) 私は各事項に付きまして書面に付て總て申上ぐる積りで、今日は何も申上げぬ積りでございましたが、只今塚本参事官から、私の方で電気燈を附けて居ると云ふ御話でございましたから、一應辯明いたして置きます。私が昨年轉任の當時行つて見ますと云ふと、總ての鳥居には残らず鳥居の中央に雲氣燈が附けてあります。それから拜殿と云ふことでございましたが、拜殿ではございませぬ、拜殿の前に神樂殿がございまして大きな建物、此破風に持つて行

つて、電気燈が十何箇附けてあつて「イルミネーション」になつて居ります。其他拜殿に接近した建物に附いて居りました。甚だ神社として不似合のことだと認めまして、直ちに撤却しやうと思ひましたが、是は神社が一箇でやつたのではありませんせぬ、それは寄附者が沢山ございまして、それと神社と交渉して、神社が承認を與へて拵へたものでございしますから、神社一箇で撤却することが出来ませぬ、それから段々交渉いたしました所が、何しろ多数でございしましたから面倒でございしましたか、⁽¹⁶⁾ 紛擾も醸さずして撤却いたしました。併し是は當時許しました當局者が宜しくない、他の人民はさう云ふことが気が附きませぬ、唯神社を賑かにしたい、又夜間明るくしたいと思ふからしました。そこで撤却は致しましたが、それに代へてするに直ちに電柱を立てまして、場所を變へまして矢張り電柱を立て、電気燈を附けて居ります。是は文明の利器で、決して神社には電燈を附けてはならぬと云ふやうな、そんな問題はなからうと存じます。唯建物などに直ちに附けると云ふことが宜しくなと思ひますので、只今は電柱を立て、暗い所には所々相變らず附けて居ります。ちよつと其事を申し上げます。

- (15) 矢野憲一『伊勢神宮の衣食住』、(東京書籍、一九九二年十二月) 二九二～二九三頁。

- (16) 佐田介石(さた かいせき) [文政元(一八一八)年四月八

日]明治十五(一八八二)年十二月九日)は幕末・明治初期の浄土真宗本願寺派の僧侶で晩年は天台宗の僧侶。攘夷運動・梵曆運動の指導者で、肥後国八代郡種山村(現熊本県八代市)の浄立寺住職・広瀬慈博の子として出生。後に飽田郡正泉寺住職であつた佐田氏の養子となる。仏教天文学の研究を行い、地動説は仏教經典にある宇宙觀、秩序に反するとして、『鎚地球略説』、『星学疑問』、『天地論征論』などを著した。維新後は『栽培経済論』を表して文明開化を痛烈に批判、農本主義・鎖国体制の堅持・国産品推奨、外国製品排斥を主張、『ランブ亡国論』『鉄道亡国論』『牛乳大害論』『太陽曆排斥論』などを主張した。

- (17) シーボルト著・斉藤信訳『江戸参府紀行』平凡社(東洋文庫)昭和四十二年、一五二～一五三頁。

(18) 大隈重信がお雇い外国人を連れて神宮を参拝したことは實際大隈自身も内務大臣時代に地方長官に対する訓示の中で述べている。当時大隈は太政官制度の下では太政大臣、左右大臣に継ぐ地位である参議の職にあつた。この際連れていった外国人は太政官のお雇い外国人とアーネスト・サトウら、英国公使館の外国人であり、この点については、「大正三年五月十六日、大隈重信内務大臣演述」(内務省神社局編『神社法令輯覧』、大正十五年四月、帝國地方行政学会、附録一～三頁)に記載がある。

太陽曆施行の詔（明治五年十一月九日）

朕惟フニ、我邦通行ノ曆タル、太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ、太陽ノ躔度ニ合ス。故ニ二三年間、必ス閏月ヲ置カサルヲ得ス。置閏ノ前後、時ニ季候ノ早晚アリ。終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル。殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ、率ネ妄誕無稽ニ属シ、人智ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス。蓋シ太陽曆ハ、太陽ノ躔度ニ從ツテ、月ヲ立ツ。日子多少ノ異アリト雖モ、季候早晚ノ變ナク、四歲毎ニ一日ノ閏ヲ置キ、七千年ノ後、僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス。之ヲ太陰曆ニ比スレハ、最モ精密ニシテ、其便不便モ、固ヨリ論ヲ俟タサルナリ。依テ自今舊曆ヲ廃シ、太陽曆ヲ用ヒ、天下永世、之ヲ遵行セシメン。百官有司、其レ斯ノ旨ヲ體セヨ。（明治五年「太政官日誌」九十七）

太政官布告第三百三十七号（明治五年十一月九日）

一 今般太陰曆ヲ廃シ太陽曆御頒行相成候ニ付來ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト被定候事

但新曆鍍板出來次第頒布候事

一 一ヶ年三百六十五日十二ヶ月二分チ四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事

一 時刻ノ儀是迄晝夜長短ニ隨ヒ十二時ニ相分チ候処今後改テ時辰儀時刻晝夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄二十二時二分チ午前幾時ト称シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時二分チ午後幾

時ト称候事

一時鐘ノ儀來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事

但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱來候処以後何時ト可称事

一 諸祭典等旧曆月日ヲ新曆月日ニ相当シ施行可致事

太陽曆 一年三百六十五日 閏年三百六十六日四年毎ニ置之

一月大 三十一日 其一日 即旧曆壬申十二月三日

二月小 二十八日 閏年二十九日 其一日 同 癸酉正月四日

三月大 三十一日 其一日 同 二月三日

四月小 三十日 其一日 同 三月五日

五月大 三十一日 其一日 同 四月五日

六月小 三十日 其一日 同 五月七日

七月大 三十一日 其一日 同 六月七日

八月大 三十一日 其一日 同 閏六月九日

九月小 三十日 其一日 同 七月十日

十月大 三十一日 其一日 同 八月十日

十一月小 三十日 其一日 同 九月十二日

十二月大 三十一日 其一日 同 十月十二日

大小毎年替ル ナシ

時刻表「略」

右之通被定候事

(20) 新潟、横浜、長崎の開港とともに神戸についても外教防止、

神意昂揚の目的をもって神戸港に大神宮を創祀するよう神戸在住の商館主らが連署して外務省に願ひ出たことが記録としてある。但し願ひ出は受理、認可されたが結果としてどうなったのかは不明である。この点について岡田米夫「大神宮崇敬の地方的発展」『神宮・明治百年史』神宮司庁、昭和六十二年、六三八〜六四〇頁。

(21) 「社寺巡礼 諏訪神社 港望む楼門華僑ら集う」『神戸新聞』平成十九年四月二日。

(22) この点については「街道名と「道路法」」『三重県史』Q & A — 52頁詳しく。 <http://www.pref.mie.jp/BUNKA/TANBO/Q/A/52.htm> (平成十九年九月十四日アクセス)。

(23) 池辺義象(いけべよしきた) 文久元(一八六一)年〜大正十二(一九二三)年は、明治、大正期の国学者、国文学者で法制史学にも通じていた。第一高等中学、女子高等師範学校、京都帝大講師や國學院大學の講師も務めた。国史学の荻野由之や国文学の落合直文とともに『日本文学全書』を編纂したことでも著名。一時期国学者の小中村清矩の養子となり小

中村を称した時期もある。落合直文とは神宮教院、東大古典講習科以来の同窓、友人で近代の国学者を語る上では欠かせない人物の一人である。

(24) 着物の袖に入るサイズの小型本のこと。

(25) 『神道文化』第十四号(平成十五年二月)、座談会「日本の護符文化をめぐって」、嶋津宣史「日本の護符文化・解説」を参照。

(26) 『角川日本地名大辞典』によれば、横浜の山手町の地は明治初期にフランス人ジェラルが山手の地に湧く湧き水を使って船舶用の飲料水として販売していたこともあり、その意味では既に硬度の高い良水の出る地として知られていたことが明らかである。

(27) 洋式水道の発祥としては明治二十(一八八七)年にイギリス人H・S・パーマーにより、日本初の大規模洋式水道が横浜に建設されたとされる。当初、パーマーは横浜市内の水を用いたが急激な人口増加のため、供給量が追いつかず相模川の支流である道志川から導水している。

